
死にたがりな男の娘が転生

ディアボロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたがりな男の娘が転生

【Nコード】

N0814X

【作者名】

ディアボロ

【あらすじ】

何か首吊って死んだら、いきなり神だとか抜かす頭が可愛そうなおっさんが居た。うまい棒買ってやるから頑張れコノヤロー。

この小説は、死にたがりな男の娘がチートを駆使して、事件や儀式をこなしていくと言うお話です。

どうやらみなさん、キャラを何処かに置き去りにしてしまった模様…… かわいいそうに……。

第一話 死にたがり、神に会う前編（前書き）

……あぁ、すいません

……どうやら私は、これを無意識のうちに書いてしまっていたようです

……どうか、許してほしい……

最近、忙しい毎日からやっと抜け出せたのがうれしくて、つい箍が外れてしまったのです……

反省も後悔もしています……

……首を吊ろう……

第一話 死にたがり、神に会う前編

「……あれ、ここ何処……」

俺は目を覚ますと、何か凄く白くて広い場所に来てしまっていた。確か俺って、首吊って死んだはずだよな？

「おお、目が覚めたかの？」

「……おっさん誰やねん……」

「ほお！？驚かなかった……だと……」

「いや、だからおっさん誰やねんて……何で俺、見ず知らずのおっさんの目の前で寝てんねんって、起こせや、見てたなら起こせや。もしくは毛布持ってこいや、後ついでに枕も」

「何でいきなり関西弁になったかはどうでも良い……。お主は何故いきなり目が覚めてこんな所に居るのか、疑問に思ってるじゃろ？」

「おお、すげえ。ここ何も置いてねえや。おっさん、こんな所で一人で住んでるとか悲しいな。なんかのキノコと百円やるから泣く

なコノヤロー」

「お願いだからわしに話させて！？わしにターンをおくれ！」

うるさいおっさんだな、全く。やっと自殺が上手く行ったかと思えば、これだよ……ああ、めんどくさいね……。

「なあなあおっさん、俺死んだのに何でこんな所に居んの？」

「今まさにその事を説明しようとしてたんじゃがの！！」

「はいはい、お口にチャックしときますよ」

「ふう、やっとこれで落ち着いて話せる。して、何故自殺して死んだ筈のお主がこんな所に居るのかと言うとじやの。お主は異端なんじゃ、だからわしが殺した」

……ちょっと待ってくれ……わしが殺した？俺は自分で首を吊って死んだ筈だぞ？

なのに、こいつは、さも自分が殺したように言いやがった……。

「俺が異端？何処がさ？俺は至って普通、至極普通の高校生だぞ？」

「お主は……生前凄い死にたがりじゃったな？」

「……まあ、そうだな」

「まさにそれじゃよ。お主は小さいころから自分の体を傷つける事に何も感じなかった。じゃからお主は毎日の様に自殺をしては失敗するの繰り返しじゃったはず」

「……何だこのおっさん……気持ち悪い……ストーカーおっさんだ……警察呼ばなきゃ……」

「いや、わしどこもおかしくないから！！これまでの流れで大体察せないかの！？わしは神じゃー！！」

「……駄目だこのおっさん……今度は自分の事を神とか抜かし始めたぞ……精神科医紹介してやるから落ちぶれるなコノヤロー」

「いい加減にせえええええええい！！」

「……これが現代では見られない雷おやじか……可愛そうに、もはや現代遅れだから、こうやって誰かを誘拐してまで叱りたかったん

だね……。素直に怒られてやるから元気出せコノヤロー」

「お願いだから話をさせてください！（土下座）」

おお、雷おやじかと思えば、今度はいきなり土下座し始めたぞ……
プライド無いんか……。こいつ……。

「分かった分かった、聞いてやるから土下座するな。ほら、今度うまい棒奢ってやるから頑張れコノヤロー」

「ああ、やっと話聞いてくれる気になったか……」

（割愛）

「ふうむ、してっと……。俺には神のご加護がついていて、自殺しても死なない体質だった……。だがその死にたがりはあまりにも異端、異質な物だから。おっさんがその神のパウワー（笑）で打ち砕いて、俺が自殺させて成功させるようにわざわざ死亡率も上げた……と……」

「うむ、やっと話し終えたわい。ふう、すっきりすっきり……ちと聞きづてならないものがあつたがの……」

「……あい分かった……おっさん、アンタ疲れてんだよ。今度五円チヨコ奢ってやるから気をしっかりしろコノヤロー」

「お主は……はあ、もう良いわい……もうめんどくさくなったから、後は大まかな事を言うぞ」

「はいよー」

「お主にはこれから転生してもらおうと思う」

「転生？何で？」

「お主には生前、神のご加護がついていた。人間が生まれつき神のご加護を受けれるのは、ごく稀なのじゃ。じゃから神達は、その人間の一生を見て、その人間の死後、神としてこちらに引き込むか。それとも悪と定めて、地獄に送るかを決めるんじゃ」

「へえ、厨二乙」

「じゃがお主は神のご加護に加え、悪魔のご加護も受けてる様じゃ」

「何それ怖い」

「じゃからお主は死にたがりじゃし、幾ら死のうとしても、神のご加護で守られてるから死なない……じゃから、お主には転生してもらうのじゃ」

「……何の為に？」

「そこで悪魔のご加護を払う儀式を行う……じゃから、お主には力を授ける」

「……おお、おっさん……何か神々しいな……拜んでやるから喜べコノヤロー」

すっげえ、おっさんのバックが光ってるよ。
これが神々しいオーラ（笑）って奴か……すっぐえな……。

「じゃが困ったことに……のう。その儀式が終わったとしても……お主の死にたがりは無くならんかもしれん……」

「儀式の意味ねーwwwwつか何で？」

「もはやお主のそれは癖みたいなものじゃ。じゃからお主はきつと、息をする様に死のとするじゃろう……」

「マジで？うわーい、また自殺できる」

「喜ぶな！ーさて、転生させる前に力を授ける。何でも良いぞ、バンバン言ってくれ」

「このままで転生させて」

「……………お主人の話聞いてた？」

「うん」

「力授けないと、儀式出来ないんじゃないよ？」

「それで死ぬかもしれないから、そのままが良いかなと」

「……………何なのこいつ（泣）」

後編へ続く

第一話 死にたがり、神に会う前編（後書き）

何か書いてる内に意味分からんくなったお

一応前後編に分けてみた……長くなりそうだったから（笑）

今回はもしかしたら短め更新がデフォになっかも……

まあ、頑張るお

第一話 死にたがり、神に会う後編

「駄目なものは駄目なのじゃ！お主に力を与えんと、わしがお主をここまで連れてきた意味がないじゃろ！？」

「えゝ、マジかよゝ」

めんどくさ……まあ、何かこいついい感じに頭逝かれてるし、ちょっと話合わせときゃ良いか。

「じゃから頭は正常じゃ！さっきからお主は心の中で毒を吐きすぎじゃー！いい加減スルーにも限界があるわい！」

「なつ……俺の心を読んだ……だと……まさか、本当に神様……なのか？」

すげえ……読唇術使える奴初めて見た……すげえ……神様マジすげえ……感動的だ！。

これが神様かーすげえ……マジパネエ……すげえ……。

「どうじゃ！すげえじゃろ！だからさっさと何の力が欲しいか言ってくれ！ー！」

「じゃあ、魔法。魔法が良い、空飛びたい。綺麗まつさらな空を飛びたい！」

「変なところで純粹じゃの……まあ、それはお主が良く世界では必要な物なので、意味がない。ほれ、次行ってみよー」

「じゃあ斬魄刀！斬魄刀が欲しい！氷輪丸とか使いたい！」

「斬魄刀か、じゃが鏡花水月は無しじゃぞ？後虚化も」

「うつしゃ！」

あれ？何その言い方、鏡花水月は無し？……つつつことは……だ……。

「では、鏡花水月以外の斬魄刀を使えるようにしよう。して、次は？」

やっぱかああああ！
すげえ、神様マジ太っ腹や……じゃあ……死神とかになれんのかな？かな？

「んじゃ次は、アंक欲しい！アंक！」

「アंक？あのオーズに出てきたメダルの怪物かの？」

「おっさん！アंक舐めんな！あいつカッケェんだぞ！マジカッケェんだぞ！！」

アंक、もう最終回で消えたのマジ悲しかった……アंकマジカッケェ！

アंकをパートナーにしたい！

「だから！アंकも強くな！」

「良し分かった。さあ、どんどん来い！まだ行けるぞ！」

「どんだけよ！？神様……アンタマジ神様だ……」

それからしばらく……俺は神様に願いを言いまくった……。

~~~~~

「ふむ、これで全部か？」

「ああ、これで全部だ！」

「……この、容姿が……めちゃんこ可愛い男の娘ってのが気になるのじゃが……しかも身長低くって言うのがの……」

「いや、生前も結構童顔だったしさ、どうせなら男の娘になってみようかなと……気にするな」

「いやあ、でもまさか……こんな事もあるもんだな！。

死んだと思ったら神様が居て、転生しろって言われて。拳句の果てにはチート能力貰って……。何これ幸せ……。

「あ、所でさ。俺、何処の世界に転生するの？」

「ああ、まだ言ってなかったな。場所は『リリカルなのは』の世界じゃ」

「……リリカル……なのは……だと？」

「そうじゃが、どうした？」

「……いや、何でもない……」

うむ……これはどうしたものかな……、リリカルなのはか……。

「なあ、原作に介入しないといけないって事ある？」

「いや、特に無いの。これはお主の儀式を行う為に転生させ、それからの生活を見るのが前提の事じゃ。じゃから、儀式を無事行いさえすれば、オーケーじゃ」

「……じゃあ、原作をぶち壊しても？」

「むろん、許される」

「……分かった……んじゃ、デバイスくれや」

「そう来ると思っとなわい。それ、受け取れ！」



そう言つて、神様は俺にデバイスを投げ渡す……。俺はそれをキャッチして、その手の中にあるデバイスを見る……。

「……何故二つだ？」

「一つはお主のデバイス、もう一つは、お主のパートナーにでも上げるんじゃない」

「……アंकの分か……ありがとう！神様！」

「よし！ここまで来れば最後の仕上げじゃー！お主に魔力を捧げよう！」

まだあつたんかい……そかー、魔力か……何か……体が熱いんですけど……。

熱い熱い！死ぬ！体の内部が熱いつて！熱い！

「いてててて！」

「我慢せい、今リンカーコアを作ってる最中じゃ……もう数秒で出来る……よし、できたぞ」

「ううゝ、痛いゝ……想像を絶する痛みだったゝ……」

「うむ、これでお主に授ける物は授けた……では、もう送るぞ?」

そう言つや否や……いきなり俺の足元が開き、俺は真っ逆さまに落ちていく……。

「うわああああああ!」

「達者でな!お主の事は見守らせてもらつぞ!」

そして……穴は塞がり……また、神様一人だけの空間となる……。

## 第一話 死にたがり、神に会う後編（後書き）

…… g d g d や…… まあ、頑張るよ

最初はオリジナルかな？

そこでアंकも出すし、どんな能力をもらったかはその都度その都度出そうかと

では、また次回！

## 第二話 始まりと欲望の鳥とキング・クリムゾン！！（前書き）

はい、アंक登場

まあ、パートナーにしたのは……この男の娘の主人公にデレッデレ！

親よりも親ばかになったアंक書いてみてーとか思ってた出しました

まあ、キャラ崩壊しまうけど、アंक好きは寄ってらっしゃいな

では、始まります

## 第二話 始まりと欲望の鳥とキング・クリムゾン！

く????

あれ？ここは……何処だ？

暗い……暗い、闇の中……でも……怖くは無い……とても安心する……。

まるで、母親に抱きあげられて、抱きしめられているかのように……安心する……。

だが、その暖かさが、すぐになくなった……。

「もう少しよ！頑張って!!」

「んうゝん!!はぁはぁ……!!」

「頑張れ！もう少しだ!!もう少しで生まれるぞ!!」

何かが聞こえる……誰か新しい生が、目の前で生まれ出時みたいに……切羽詰まっていた……。  
そして、この体が動く間隔……。

「んうゝん!!」

「頑張れ!頑張るんだ!!」

「んうゝん!あああ!!」

「……オギヤア!オギヤア!(うおっ、眩しっ!)」

俺はいきなりの光にびっくりし、目を閉じ……っで、あれ?何も見えない……。

既に目を閉じている状態なのか?

「産まれたぞ!とうとう産まれた!」

「ええ!貴方!」

「オギヤアオギヤア!(俺、まさか最初から!?リスタート!?)」

とにかく……俺は産まれてしまったらしい……。

ゝそれから三年後ゝ

……ふう、まさか、あんな羞恥プレイがあったとわな……。  
あ、どうも……。どうやらキンクリしてしまったようだね……。ここは  
すでに三年後の世界……。  
早いね……。この三年間はとても恥ずかしかったと言えよう。

ああ、言い忘れていたね、俺の名は……。ああ、転生前の名は忘れて  
しまったんでね、何て言ったら良いか……。そう、今の名前は……。ア  
ニス・クロイツベル……。そう、俺の名前は厨二になってしまったん  
だ……。

「アニス〜！どこに居るの〜！」

「あつ、お母さん！こつちやこつち〜！」

前方に、俺を捜してるお母さんと呼ぶ。  
お母さんの名前は、アニス・クロイツベル……。うむ……。何処かの某  
幻想郷のアリスさんみたいな人だ……。

「もう、勝手に居なくなっちゃ駄目っていつも言ってるでしょ？」

「えへへ、ごめんなさい。でもでも！アंकが居るからだいじょ  
ーぶー！ね！アंक〜！」

「ああ、そうだな。大丈夫だ、俺がしっかり見ていた」

「アंक！もう、しっかり見てる位なら、ちゃんと注意しなくちゃ駄目よ！」

「ふん……」

アंक……そう、彼はアंक……下の名は無い……。

彼がどう言う経緯で今ここに居るのかって？……何かね、この人、

俺と同じ神様に会って、使命を受けたらしいんだ。

俺のパートナーになれて言う……まあ、その対価に神様がアंक

に人間の体とコアを全部（タカ・コア三枚クジャク・コア三枚コン

ドル・コア三枚）をくれてやったらしい……。

神様、アंकも強くって事、覚えていたんだね！

で、どうやってここに来たか？だよね？

アंकは……そうだね……神様に送られてから、何かこの家で働きたいと言ったらしい……。

何でも俺の家は金持ちらしく……それで、俺が産まれたから専属の執事兼ボディーガードを欲していたらしい。

それを利用して、アंकは俺の専属の執事兼ボディーガード！



最初は乗り気じゃなかったらしい……いきなり神とやらに会って、俺のパートナーになれとか言われて……まあ、アングのキャラじゃないしね。

でも、そこは神様……どうやらアングに五感の他に、情も入れてくれたらしい……。

だから、俺の執事をしている内に、情が移り、今では仲良しこよし！ってわけ。

因みに、俺が転生者だって事はアングは知ってる。

「それより、ここで何していたの？」

「アングと遊んでた！」

「そう……もう、アニスはアングにすごく懐いてるわねえ。羨ましいわあ」

「当然だ、産まれてからすぐに一緒に、付つきりだったんだ。それで懐かないんだったら俺が困る」

「あらあら、アंकも言うようになったわね。それじゃ、おやつにしようか！」

「やった〜!!」

「今日はクッキーを焼いてみたの！」

「……何……だと……」

「……おい……逃げるぞアニス」

アंकの声で我に返り、俺はアंकと共に逃げる。

ヤバイ！やばいやばいやばいやばいやバイ！母さんの料理は駄目なんだ！

核以上に危険なんだ！やばいやばい！まだ死にたくなあああいい！！

「あ、何で逃げるのよっ！？アंकも！」

……だって……お母さんの料理は、洒落にならない位……まずいん

ですもん……ねえ。

一回、神様に再び顔見せに飛んで行っただ……魂が……。

こんなのが、今の俺の日常！

あ、あともう一つ……。

死にたがりは何とか自分で抑えてますぜ……まあ、アंकも居るから、そうそう首吊ろうとか、手首切ろうとか考えなくても良いんだけど。

時々、無意識に何だけど……剣とかで訓練してる時に、自分に切っ先を向けちゃう時があるんだ……。  
一回は未遂、二回目はアंकが何とか防いでくれた。三回目は少し首に先が刺さった程度……。

やっぱあれだね、死がこびり付いて取れないや……。

お父さんやお母さんは、何かの病気なんじゃないかって思って、何回も検査をしてもらった。

でも結果は正常……でも、こんな俺でも気持ち悪がらずに接してくれてるから、頑張って抑えている。

「アニス、今日も可愛いな」

「えへへ」

今の声の正体はお父さん……名は、クラウド・クロイツベル。  
富豪息子だったらしく、家業を継いで、今に至るらしい……。  
そして、親ばかだ……気持ち悪い位に親ばかだ……でも、嫌いじゃないわ！！

「今日もご苦労だったね、アंक君」

「アニスの専属の執事だからな、これ位は当たり前だ」

まあ、やっぱりアंक。雇い主に敬意を払おうとしないし、敬語も一切使わない。

だがお父さんはそこが気に入った！とかで、アंकを雇うことにしたらしい……。

「さて、皆もそろったし、夕飯にしましょうか！」

「じゃあ、俺はそこらの周囲を見ている」

そう言って、つかつかと移動し、他のメイドや執事達の所で立っている。

……こうして見ると、やっぱりアंकって執事の中でかなり浮いてるな。

「さ、頂きましょうか」

「「「この世の全ての食材に感謝を込めて、いただきます」」」

何故トリコ風の挨拶なのかって？

……まあ、俺もそこには突っ込んだよ……何でっ？ってな……まあ、気にしないことにしたよ……。

第二話 始まりと欲望の鳥とキング・クリムゾン!! (後書き)

ああ、男の娘可愛い……

アニスは猫を被ってます

本当だったら親にも

「~~~~~やるから元気出せコノヤロー」とか

「……頭が弱いんだね……頑張れコノヤロー」

とか、毒吐きます

さて、ガンバろ

読んでくださりありがとうございます

第三話 どうやらこの世界では、斬魄刀は……（前書き）

はい、斬魄刀の回です

ぶっちゃけ、無理やり感が否めません

まあ、そこは目をつぶってくださいなと

それでは、始まります

### 第三話 どうやらこの世界では、斬魄刀は……

アニスサイド

やあ、アニスだよ。

そうそうキンググリームゾンは発動しないから安心したまえ。

それにしても、ホントこれってチートボディーだなーって思うよ。

術式やら、勉強やら、剣術やら、体術やら、魔法やら……全部すぐに覚えられる。

そして、この家では代々、ベルカ式やミッド式は使わないらしい。もちろん使えるが、俺達の血筋が使える魔法がある……。

それが、クロイツ式って奴らしい……まあ、あれだね、何の捻りもないね……。

それで、そのクロイツ式何だけど……何の事のない、斬魄刀を媒介にして魔法を放ったりするんだ。

一度お父さんに見せてもらったけど……凄かった……。



「喰らえ！牙王炎！」

とか言つて、いきなり始解しちゃったからもうびっくり！

まさか原作設定に無理やり入れてくるとか……マジありえねえよ神様……。

しかも、お父さんの斬魄刀は、相手を喰らいより鋭く、より強く、より軽く、より重くなるらしい……そして、火を纏って相手を攻撃したり、そのまま斬撃にして出せたりする……。

……あんたの家業一体何なんだ……。

そして、今日俺は……その契約をしてる真っ最中です！

「良いかアニス、自分が使える斬魄刀を呼び起こすんだ……」

「でもお父さん、俺まだ子供だよ？それに、何でこんな早い内からなの？」

「それはね、アニス。斬魄刀は扱いが難しいんだ……。私も、クロイツベル家の中では優秀だった方だ……。私がアニス位の時には、既に魔法も全で一通り終わらせ、勉強やら何やらも学び終えた……。そんな私でも、始解に至るまで五年。何も言わないで始解が出来るようになったのが三年。ちゃんと斬魄刀を屈服させるので六年年。そして、最後の秘術……。卍解を会得できたのが……。更にその十年後何だ……。」

マジかよ……。俺と同じ位の年から始めて……。大体27歳位で卍解に至ったとか……。

まあ、死神と人間の時間を合わせたり較べたりしたらあれか。それでも、凄い方なのだから……。

「アニス、お前は私よりも強くなる。それに、私より才能豊かだ……。だから、私はお前に早く契約して、斬魄刀を使いこなしてもらいたい……。」

「……分かったよお父さん！俺、頑張る！！」

「うん！その意気だ！さあ、その魔方陣に入るんだ」

俺はお父さんが書いたお手製の魔方陣の中に座り込む。

「さてアニス、さっき私が教えたとおりに唱えるんだ。分かったかい？」

「うん！分かった！」

俺はお父さんに笑顔を見せて、魔力を集中する……。

「……私の剣となる者よ、この問いに答え姿を現せ。導の道は既に  
ある、我が身に集え！契約、執行！！」

その瞬間、魔方陣が光だし、俺はその光に包まれる……。  
何だろう……。俺の体に何かが入ってくる感覚は……。暖かい……。すっ  
げえ心地いいわ……。

そしてしばらくするとその光は収まり、俺を浮かせていた風は無く  
なった……。

「どうやら成功したようだね。さあ、斬魄刀を出して、私に見せてくれないか？」

「分かった！」

俺は手に魔力を込めて、斬魄刀を取り出す……。握られていたのは、何の変哲もない日本刀……。まあ、まだ始解できてないし、当たり前か。

「……これは……何と……凄いのを呼び出したな……」

「？お父さん、何の斬魄刀が分かるの？」

「ああ、名前は言えないが……氷結系最強の斬魄刀と言っても良いだろう……」

「……オーケーおとん、今ので分かったから……氷輪丸だわこれ……」

…。

まあ、嬉しいわ。氷輪丸を一発で引き当ててよかった！  
でも、おかしくね？あの神様、鏡花水月以外の斬魄刀なら全部使える言つてたやん……。

まさか……ね？

俺は試しに、空いている左の手に魔力を集中する……。

カチャ……。

「なっ！？」

「……あはは……」

ビンゴ……どうやら俺は、ほとんどの斬魄刀を、体の中に所有してるらしい……。  
しかも……何か、どんどんまだまだ増えてってる気さえするのだが

……。

「何故斬魄刀が二本も！？……まさか、二本一変に、所有者と認められたのか！？」

いや、二本どころか……ほとんどだよおとん……。

でも、これは口が裂けても言えないな……流石に気落ち悪がられるだろうし……。

でもま、これで斬魄刀を手に入れた訳だし……良かった良かった。

「しかもこれは千本桜！？……アニス……やはりお前は、私以上に才能がある子らしい！」

「ホント？アニス、嬉しい！！！」

お父さんは喜びのあまり、俺を抱きしめる。

おあう……流石クロイツベル家の家業を継ぐ者……腕力パネエ……出る、出ちゃいけない物が出る……。

「お父さん、苦しいよう……」

「おっと、すまんすまん。嬉しさのあまり、つい強く抱きしめすぎた様だ。わははは！」

そう言いながらガシガシと俺の頭を撫でる。

いやぁ！一時間も掛けてセットした俺の髪！？……まあ良いか、後でアंकに結ってもらおう。

「お父さん、これでもうお終い？」

「ああ、これで無事契約は完了。もう戻っても良いよ」

「うん！分かった！」

~~~~~

「それで、何をやってたんだ？」

「えへへ、クロイツベル家に伝わる契約をやって来ました」

「そうか。それで、何と契約したんだ？」

「斬魄刀」

「斬魄刀？何だそれわ」

「俺の居た世界では漫画の話に出てきた、死神が使う武器何だ。でも、あの神様がどうやらこの世界の設定に無理やり入れたらしい」

「あの馬鹿は……そんな事したら世界が崩壊すんぞ……」

「まあまあ、神様だから何とかなるんじゃない（笑）」

「まあ、今の俺にはどうでも良いけどな。お前さえいれば俺は生きていけるし」

「あらあら、欲望の鳥とまで言われたアंकが、まさかこの三年で丸くなるとは」

「人間の感情、五感、全てを手に入れ。こうして人間と向かい合ってみると、中々どうして。人間も捨てたもんじゃないと思えてくるから不思議だ。人間何ぞ、欲望の塊でしか思ってたあの頃が懐かしい」

「……映司に会いたくないの？」

「……あいつが掴む手は、もう俺じゃない。それに、勘違いするな。俺とあいつは、利害が一致した者同士だ。あいつは力が欲しかった、俺は命が欲しかった……だからあいつをオーズに選んだし、俺はあとして、ただのメダルの塊が死ねるところまで来た……」

「ふふふ……アंकも素直じゃないね」

「ふん……ほら、出来たぞ」

お、結び終わったか……どらどら。
俺は手鏡で、今の自分の髪型をチェックする。

「……うん、ありがとうアंक！いやあ、アंकも上手くなったもんだね。最初の頃は戦っただけしか能がなかったのに」

「うるさい。つたく、誰のせいでこんな事をしなきゃならなくなってるか分かってんか？」

「はいはい、アंकは最高のパートナーです あはははは！」

「……つたく、こりや重症だな……」

もう、重症とか言わないでほしいな！

「それじゃあ、僕はちよつと庭に行くね？」

「？何かやるのか」

「うん、斬魄刀と、ちよつとO H A N A S I、じゃなかった、お話してくる」

~~~~~

「とは言ったものの……斬魄刀とどう話したら良いのやら……」

つつか、ブリーチとかもうつろ覚え何だが……まあ、斬魄刀だけで、

鬼道や縛道は使えるようにはなっていないし……それはそれでいいか。

あんな長い詠唱、覚えられんから……。

「まあ、とにかく氷輪丸だけでも使える様にしたいな」

出来るだけ自力で頑張ろう！

んで、出来なかったら、少しお父さんに助言もらおう。……教えてくれるかな？

「さて……精神を集中させてっと……」

一応、月並みだけど、座禅をして精神を集中させよう……。

あ、ちなみにちゃんと結界は貼ってあるよ？まあ、怪しまれないでしよ。

一応俺、全部魔法覚えてるし、結界貼ってたって、魔法の練習でもしてるだろう程度にしか思われないだろう……。

「……………来た……………」

……………案外早かったな……………俺は、そのまま精神世界に入っていく……………。



「久しぶりじゃの」

「……あるえ」

「……やっほー」

「……はっ」

「……………何で神様が居んの？」

精神世界に行っと思ったたら、神様の所に来てた…………。

…………やべえ、今軽くポルナレフ状態なんだが…………。

「どうしたじじい、寂しくなったのか？俺をこんな所に連れてきて。何かの魚と一円やるから帰せコノヤロー」

「いや、お主が自分で来たんじゃろうが！！」

「……………何……………だ……………」

「まあ、大方斬魄刀と意思疎通してみようと試みたんじゃろうけどな……………」

「……………やっぱりさんがしでかした事か……………」

「お主、言ったじゃろ？斬魄刀が使いたいと。その願いが既に叶っているのじゃから、初めから使えるのじゃぞ？」

「…………それを早く言えよ!!」

座禅して損したわ!

時間損したわ! 全く、何なんだこいつは……。

「じゃあ、さつさと体に戻してくれ」

「自分から来たくせに……それじゃ、もう来るんじゃないぞ?」

そうじじいと言った瞬間、懐かしい浮遊感に襲われる……。

「また落ちるのかあああああああああ!!」

~~~~~

「…………はっ!?!」

…………何だっただんだ今の……。

とにかく…………まあ、斬魄刀はもう使える状態なのは分かった。

でも、これお父さんに見せたら驚くだろうな。始解も年数掛かつ

て漸く出来るようになったって言ってたし……。
まあ、見せるのはもっと先の話かな。

「それよりも……やってみますか」

俺は座禅を止めて、斬魄刀を持つ。

………んじゃ、行っきまーす！！

「霜天に坐せ！氷輪丸！！」

そう唱えた瞬間……この周りの温度が一気に下がるのを感じた……。
だが、寒いとは思わない……、このままでも動きに支障は無い。

「………すげえ………これが氷輪丸………」

そして、後ろを向く……そこには水と氷で出来た龍が宙を舞っていた。

「………卍解は………たぶん出来るんだろぅが………」

やったら結界壊れそうだし、それに、下手に膨大な魔力を使っつて

お父さんやお母さんに気づかれるのも嫌だから、よしとこつ。

さて……次はどんな事が待っているのやら……。

第三話 どうやらこの世界では、斬魄刀は……（後書き）

結局 good good

流石ディアボロクオリティー

でも、リリカルなのはの小説は、実際初めてではないんですが……

無印から書くのは初めてという……

今まで二期と三期、もしくは全くオリジナルの話で書いたりしてきましたから

無印か……でも、今回は……はやてと絡ませたいな

アंकが、闇の書起動まで子煩悩みたいなキャラになったの書きた
いし

……よし、やっぱ今回も無印は書かない！

読んでくださりありがとうございます

第四話 アニスの訓練風景（前書き）

やあ

……やあ……

……特に話すことは無い！

本編始まります

第四話 アニスの訓練風景

「おはよ〜……」

「おはよう。ほら、さっさと顔洗って来い」

「……む〜……」

どうも、朝にめっぽう弱いアニスです……ふあ〜。

「……アंक〜……眠い〜……」

「俺に寄りかかって来るな！さっさと顔洗って目え覚ませ！」

そう言いながら、アंकは俺を洗面所まで運ぶ。

優しっさすい〜……ふあ〜……あれだね……肉体に精神が引っぱ張られるってのは本当にあるんだね。

「て言うかいい加減その恰好で寝るのは止める！」

「……いや……裸ワイシャツは……眠りやすい……んだよ……」

裸ワイシャツこそジャスティス……他にはスパッツとか……。

「……グー……」

「寝るなあああ!!」

~~~~~  
~~~~~

「……超スツキリ!」

「俺は朝から疲れた……」

「どうしたアंक? まだ朝だよ? モナカ買ってやるから元気出せ」
「ノヤロー」

「………はぁ………」

「あー、ため息されちった……」。

「ごめんごめん、ちょっと調子に乗っちゃった。謝るから許して？
ごめんね」

「……まあ、アイスで手を打ってやらん事もない」

「あはは、やっぱりアंकと言ったらアイスだよネ」

ヴィータやスバルと良い勝負出来そうだよネ。
大食いとか？いや、でもアंकも今は普通の人間の体だし……いや、
行けるか。

「それよりも、朝食に遅れるぞ？」

「あ、そうだった」

そう言われれば、もうそんな時間か……。

俺は一回自分の部屋に戻り、私服に着替える。一回寝ぼけたまま朝食
食食べに来ただけだよ。

ワイシャツとパンツだったから、驚かれたよ。

まあ、まだ三歳だし、ワイシャツはサイズぶかぶかだから、見えな
かったけどさ……何だろう……アルカナのアンジェみたいな感じ？

まあ、そんな格好で来たから怒られるかと思ったけど……。怒られなかった、むしろ可愛いとまで言われた……。だから俺は、もうお母さんやお父さんの前で、裸ワイシャツは見せないと誓ったんだ。

アंकには見せるよ？だってアंक、特に反応もしないから。

「おはようございます、お父さん、お母さん」

「おはよう、アニス。今日は少し遅かったね？何をしていたんだい？」

「少しアंकとお話をしていました。すみません」

「お父さんは怒ってる訳じゃないから、謝る必要なんてないのよ？アニス。さ、皆そろったことだし、頂きましょうか」

俺はいつもの席に着き、手を合わせる。

「この世の全ての食材に感謝を込めて、いただきます」「」

だから、何でトリコやねんって……。

~~~~~

「さて、今日は何をするかな……」

朝ごはんを食べてから、一時間。

これからお父さんと訓練をします。まあ、自分としては斬魄刀で戦いたいんだけど……。

始解を見せたら驚かれるかもと思って、それは避けてるよ。

たまに秘密裡で結界貼って、始解をして訓練はしてるけどね。

因みに、俺が結構使いやすかった斬魄刀がこちら。

氷輪丸、双魚の理、灰猫、千本桜、雀蜂位かな。

氷輪丸は長いけど、その分触れたらなんでも凍らせれるから良いんだ。

次に双魚の理、双剣でその分短くなるから良いね。灰猫と千本桜は、刀身が消えるから、持ちやすい。

雀蜂は指に着けて暗殺をする時には有利だね。

後は刀身が長くて重いから、振るのがキツイ。

斬月なんて始解状態のまま出てくるから持てない。卅解すればまだましになるんだろうけど……。  
後は……多すぎてまだ使ってないんだ……。

「それじゃあ、魔法と剣の訓練でもしようか」

おっと、地の文で話してたら、いつの間にかお父さんが今日の訓練を決めたようだ。

「分かった！」

「一つ言っとくが、あのオリジナル魔法は禁止だぞ？」

「分かってるよ。デバイスしか使わないから」

オリジナル魔法……デバイスを使わなくても、詠唱で使える魔法……。

まあ、オリジナルじゃなくて、ネギまの何だけどね。

俺の始動キーはエヴァのをパクりました。

マギア・エレベア

闇の魔法は使えないよ？流石に雷速瞬動とかは使いたくないよ。

人間で居たいのさ……後は、ガッシュ達の呪文が使えます。

まあ、流石に口から雷は出さないよ？そこはゼオンを模して手から

出すよ。

因みに、これが管理局にバレたら間違いなく研究対象に指定されると、お父さんに言われました……。目がマジだったとです……。

「それじゃあ、始めようか。アイギス、セットアップ！」

《スタンバイレディー、セットアップ》

「クイーン、セットアップ！」

《セットアップ》

俺とお父さんは、二人同時にバリアジャケットを纏う。

お父さんのバリアジャケットは、騎士甲冑の様だ……。あれ、シグナムみたいな固っ苦しい奴。

俺は……。まあ、最初どんなバリアジャケットにしようかって考えて、ブリジットの格好にしてみた。

どうやらバリアジャケットのデザインは選べるらしい。そして下はスパッツ。

「相変わらずのバリアジャケットだね……。アニス……」

「修道服っぽくて可愛くない？」

「時々、本当にアニスは男の子なのか、心配になってきたよ……」

まあ男の子じゃなくて男の娘ですけどな。

心配するなお父さん、ちゃんと俺にも息子はついてるから安心しろ  
コノヤロー。

等と、心の中で言ってみる。

「それじゃあ、先ずは剣からだ」

「うん！」

「ハアッ！」

お父さんが俺に剣を振るってくる。

俺はそれを避けて、反撃に回る。だがお父さんはそれを読んでいた  
かのように回避し、再び斬りかかってくる。

「プロテクション！」

ガキン！

「おお、だいぶプロテクションを瞬時に出せるようになってきたね。でも、まだまだだ！」

ギギギ！ピキ！ピシ！

うつそおん！？ヒビ入って来てますやん！  
完全に割れる前に、後ろに後退つと……。  
俺はプロテクションを消したと同時に、後ろに下がる。

「ハアッ！」

ガキン！

「そら、下ががら空きだ」

ガッ！

足を払われ、俺はそのまま地面に転ぶ。  
それを好機と言わんばかりに、お父さんは追撃をしてくる。

「ハア！」

「爆ぜろ！」

ドガァン！！

俺は故意に魔力を暴走させ、空間を爆発させる。  
そして煙を利用して、お父さんとの間合いを取る。  
……よし、これぐらいで良いだろう……。俺は魔力を剣に流し、構える。

「いつけえ！！」

ズバン！！

おっし！直撃コースk t k r！  
やっとお父さんに一撃を入れれる時がキターーーーー！！

「喰らえ！牙王炎！」

……あれ？今のって始解だよね？

……あれ、お父さんの魔力が上がったよ？何で何で？おかしいなあ……  
何か大きい炎の龍が浮いてるよ？  
……どーしよう……。まさか斬魄刀使われるとか……思ってもみなかったよ……。

「いやあ、まさか私が斬魄刀を解放してしまうとは。H A H A H A  
H A！」

「せっけえ！せっけえぞお父さん！何だよそれせっけえよ！せっかく一撃入れたと思ったのに！柏餅やつから斬魄刀しまえコノヤロ  
ー！」

おっと、少し素が出てしまった様だ……。  
つか、H A H A H A H Aじゃねーしー！！ぜってえ確信犯だ！ぜってえそうだ！

「でも、これは私も少し大人げなかったと思う。反省はしている、だが後悔はしていない！」

「……もう良いよ……」

何かこのお父さん……威厳の欠片もねえ気がしてきた……。  
まあ、これはこれで、有りなのかもしれないけど……さ、少しは何とか粘ってみようよ……むしろ安易に斬魄刀解放しちゃ駄目じゃ

ん……。

そこはプロテクション貼るとかさ、ブリッツアクションやソニックムーブで避けれたはずだよ？

まさか、子供の攻撃に、わざわざ斬魄刀って……ハア……。

「そうか……じゃあ次は、魔法のの練習だ」

「はい。クイーン、杖お願い」

《了解しました》

「アイギス、ガントレット」

《オーケー》

……うん、ガントレットって、近距離だといつも思うんだけど……中々どうして……お父さんの砲撃や魔法弾は、手から出るんだ……しかも正拳突きに乗せてくるからさ、威力マジキチ……。  
アンタは何処の薬味坊主なんだと言いたい。

「行くよ！アップ！」



俺のその掛け声で、十数発の魔力弾が周りに発生する。

まあ、なのはも結構掛け声使ってたし、違和感無いと思う。

「ストップ！」

そして、周りに魔力弾を発生させたまま固定する。

「ホント、アニスは私以上に才能豊かだな。そんな使い方、一度も考えたこともなかったよ。ハアツ！」

そう言いながらちゃっかり魔力弾放つとるやないですか……。

まあ、いいや……。結構数多いけど、先ずは回避を試みよう……。それで、避けれない奴が出てきたら、一発ずつ使って落とそう。

「よっ！ほっ！はっ！おっと！危な！きゃっ！うわ！あらよっと！こなくそ！」

良し、計九発は避けた……。でも、後ののはキツイな……。

お父さんの魔力弾は数にして約四十発……。キツイ……。子供の訓練になんちゆう数を……。

「これは無理だな、ゴー！」

俺は一発ずつ使いながら、的確に落としていく。  
途中、魔力弾は切れたが、簡易砲撃で逃れた……いや、マジで危な  
かったよ……。

~~~~~

「よし、これで今日の訓練はお終い！」

「ふにゃ……疲れたあ……」

「よしよし、良く頑張った。さ、帰ろうか」

お父さんは俺の頭を撫でて、抱っこする。

お父さんの腕は暖かいのう……あ、今日も疲れた……今日は結構
長い時間訓練したな。

「……お父さん……」

「何だい、アニス」

「……俺……強くなれるかな……」

「アニスならなれるさ。既にBクラスの魔導師には遅れを取らない程度には強くなってる。後三年くらいしたら斬魄刀も使える様になるかもしれないし、それに、その時は今よりもっと強くなってるさ。アニスは生まれつき魔力量が多いんだ、きっと、強くなれるよ」

「……ありがとう……お父さん……」

微睡の中……お父さんの優しい言葉を聞きながら……俺は静かに目を瞑った……。

第四話 アニスの訓練風景（後書き）

三歳の息子に斬魄刀を開放するお父さんマジリスpektつす

まあ、そんな感じの第五話、いかがだったでしょうか？

次回はもしかしたらキンクリするかもしれませんが……このまま三歳のころのアニスの話を書いていたら、いつになったらはやての所にたどり着けるか……

本編&儀式開始編辺りで、アニスのプロフィールを書きますゆえ、しばしお待ちを

それでは、読んでくださりありがとうございます

第五話 鬼神の伝説と、別れと誓い（前書き）

まあ、疲れた……

さて、今回は少しシリアス&正解があります

ご注意を

では、本編始めます

第五話 鬼神の伝説と、別れと誓い

良くも悪くも無く、普通の幸せを実感しながら、早六年……あ、キンクリし過ぎだって？気にしないの

まあ、そんな冗談も言ってもらえないんだけどね……。特にこれと言って、知りたかったわけじゃない……。

俺としては、お父さんの仕事なんて、興味がなかった。

ただ、一族の家業を継いだ、程度にしか聞いてい適ったので、会社の社長かなんかでもしてるのだろう……そう思っていた。

「貴方……」

「ああ、私としても、信じたくはなかったよ……」

「アニスは、やっぱり」

「ああ……アリス……」

「……貴方……どうします？」

……さて、このシリアスな空気……どうしたら良いのやら……。

どうも、アニスです。

ちよつと寝る前にホットミルクを飲んで寝たので、少ししてから尿意に襲われたのでトイレに起きたら……こんな話に遭遇してしまいました……。

「こういう時……やはり我が子を守る手だけが一つや二つだけ……というのが……情けなくて、申し訳が立たないよ……」

「仕方ないわ……それほど、貴方が切羽詰まってるんですから……」

「……どうして……我が子が……我が子が……禁忌の子だとわ……」

禁忌の子？何だよ……それ……。

「少なくとも、後一二年は大丈夫だと思っていた」

「でも、もう明日攻めてきそうな空気がありますね……」

「一応、隠蔽の魔法を使つてのだが……もう、無理か……だから、私の命に代えても、あの子と、君は守り抜く」

「何で……そこまでして」

「……何、私は十分幸せだ……君と恋仲になれて……アニスと言う……私とお前の、両方の血を受けてくれた子供が出来て……そして、その両方を、胸を張って守れる今の自分に……私はもう、何もいらない……」

「いない……何て……悲しい事……言わないで……！」

「……アリス……明日、全てを話そう……」

「ええ……分かってるわ……あの子が……鬼神の子と言う事を……」

鬼神の……子？

何だよそれ……鬼神の子って……。

「もはや、一刻の猶予もない……私の仲間も、もう騒ぎ立てている。鬼神の子が復活した……と。私は、今まで一緒に戦ってきた仲間と、殺し合うのが怖い……見る、今だって、考えただけで手が震える……。確かに、私は何百何千と、人間を殺してきた……それでも、犯罪者を裁くことに、何も感じなかった」

人間を闇討ち？それが仕事？……何なんだよ……一体全体……どうなってんだよ……クロイツベル家ってのは……！？

「だが、我が子はその対象になるとわ……思いもよらなかった……」

「貴方……」

なあ………どういう事だよ………お父さん、お母さん………。

俺が、

鬼神の子？俺は、殺されるべき対象なのか？

「……私………決めたわ………貴方と共に、戦います」

「それは駄目だ………君には、アニスに着いていてもらいたい。戦闘は私に任せて、アニスと一緒に逃げてくれ！」

「私には………やはりどちらも選べないの。クラウド………アニス………どちらを取るべきか。私は………あの子を、幸せにしたい、貴方と一緒に。だから、共に戦いましょう………そして、生きて………アニスと一緒に、幸せに暮らしましょう………？」

「お前………まさか………」

「ええ、あの子だけでも逃がします。そして、私達が勝って、自分

たちの足で……あの子を迎えに行きましょう……?」

「……転移させる場所は決まっているのか?」

「第97管理外世界、地球。ここは魔法文化も無く、管理局も手が出せないし、ほとんど知らない地よ……」

「……分かった……あの子には辛い思いをさせてしまうな……」

「ええ……そうね……」

「……何なんだよ……何なんだよ、その話は……。
鬼神の子? 戦う? ……どうして……そんな話をしてるんだよ……。
俺はフラフラしながら、自分の部屋に戻り、そのまま……眠りに
ついてしまった……。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

次の日の朝……何故か今日の空気は、いつもと違っていた……。  
アंक以外の使用人は皆居なく……この部屋には、俺とお父さん  
とお母さん……そしてアंकのみとなっている。

「……お父さん……話とは何でしょうか？」

「……ああ、何だ……その……な……」

煮え切らないお父さん……それを見て泣きだしそうになっているお母さん……。

俺は、不意に、昨日の事を口にする。

「……鬼神の子……」

「！……アニス……」

「昨日、二人で話してたよね？俺が鬼神の子だって……」

「……聞いていたのか……」

「盗み聞きするつもりはなかったんです……たまたま、トイレに起きて、部屋に戻ろうとした時に……偶然……」

俺の話を聞き、お父さんは神妙な顔をするが……すぐに観念したような顔になる。

「すまない……アニス……」

「何故、謝るんです？」

「自分の息子を救う手だてが、もう一つしか思いつかなくて……本当にすまない！」

「貴方……」

「……それより、話してくれますか？何故、僕が鬼神の子と呼ばれなくちゃいけないのか……」

「ああ……説明しよう……いきなり、そんな事を言われても……理解できないだろう……」

そう言うや否や……すぐに、お父さんは鬼神の子について、語りだした……。

ベルカ時代……まだクロイツベル一族が、そんなに栄えていない時代の時の話……。

斬魄刀を使う我ら一族の中に、アイリスと言う、クロイツベル一族の天才が居た……。

彼はクロイツベル家の中でも異質の存在で、僅か一年未満で始解を習得、そして翌年で斬魄刀を屈服させ、二年で卅解に至った者だった……。

そして、そんな彼には、更なる異質があったのだ……

そう、彼は斬魄刀を複数所持する者だったのだ……。確かに、二本使える物は、10年に2〜3人、居るか居ないかの話だったのだが……。彼はその数30以上の斬魄刀が使えたのだ……。

そして、そのものの戦い方は……。狂気に満ちていた……。ある者はばらばらに、殺して解して晒して並べてあり……。ある者は、氷漬けにされ、ある者は、火達磨になり……。ある者は、雷に撃たれ……。ある者は、毒で殺され……。まるで、自分の斬魄刀の能力を試したいが為に、剣を振るっている存在だった……。

そして、ある事件が起きた……。彼は何を思ったのか……。他のクロイツベル一族の者の斬魄刀を奪い取り、契約権を奪ったのだ……。それも、斬魄刀の能力で……。

そして彼は、裕に60本は超える斬魄刀と契約を結び……狂気に飲み込まれた……。

その者は、鬼神と言われ……彼を殺すのに……クロイツベル一族が総力を挙げて……倒したのだと言う……。

だが最後に、鬼神は死に際にこう言い放った……。

「いつの日か……俺と同じ……複数斬魄刀を所持出来る……子が……生まれるだろう……ククク……それは、俺の生まれ変わりだと思……え……」  
と

~~~~~

「そして、お前が生まれたわけだ、アニス……」

……そう言う事だったのか……だが、確かに俺は、お父さんとの斬魄刀の訓練で、二本試したが……何故、俺が他にも所持しているつてのが分かったんだ？

「でも、お父さん……俺は斬魄刀を二本しか使ってませんよ？」

「……アニスが、時々結界を貼って、斬魄刀を開放してるのは知ってる……。斬魄刀を解放したら、多かれ少なかれ、使用者の魔力の質が変わるんだ……。だがアニスは……。その移り変わりが凄く激しく……。斬魄刀解放時の魔力量が、いつも違ったりしたのが分かった……」

……そう……だったのか……。

……調子に乗った……。俺の落ち度だ……。

「だけど……他の人に知られるような事はしていないんだけど……」

「クロイツベル一族の中には、予言が出来る斬魄刀所持者が居る。仕事で集まる時に……。取集が掛けられたんだ……。そして……。疑われたのが私だ……。ここ九年間の中で、クロイツベルの一族で生まれた子供が、お前しかいなかったからだ……」

「……………」

もっ、何も考えられなくなった……。

~~~~~



~~~~~

お前を転移させるのは……明後日……。魔力がまだ十分に溜まっていないから、もう少し時間が掛かる……。それまでに、荷物の整理をしておきなさい……。

そう言われて、家族会議的な物は終わった……。

「……どうするんだ、お前」

「……出来るなら、一緒に戦いたい……」

「……死ぬかもしれないんだぞ」

「それでもだよ。大事な家族見捨てて、俺だけ一人おめおめと逃げられる訳がない……」

「お前を狙ってくる連中だぞ？お前が前に出てしまえば、たちまちそいつらの格好の的になるだけだ……たぶん、お前の親父も、母も、他の奴に足止めされて終わりだ」

「……なら……どうすれば良いんだよ！！それしか他に手がないん

だ！……俺に、もうそれ以外に考えられないんだ！」

「……はあ……」

アंकはため息をつきながら、俺の頭を撫でる……。

「少し落ち着け……」

「……アंक……」

「お前が逃げれば、後はあの二人が安心してその場から離脱出来るだろう。それ位の腕はある筈だ……俺が何で、お前の親父に、お前を守ってくれて言われたと思ってるんだ……」

「アंक……」

少し落ち着きを取り戻した俺。

取り敢えず、荷物は言われたとおり整理しとこ……そう思ってベツドから立った瞬間！

ドガアアアアン！！

何処からか爆発音が聞こえた……。

「アंक！」

「ああ！」

俺とアंकは、急いで部屋から出た……。

ゴアア！ドガア！

移動する度に、爆発音が激しくなる……。
もう……攻めてきたのか？

こんなタイミングで……攻めてこなくても……。
何で……このタイミングなんだよ！！

俺は音がより一層激しく聞こえる部屋のドアを思いきり蹴破る。

「お父さん！お母さん！」

そこには、何人かの敵と対峙してるお父さんとお母さんの姿が目

映った……。

相手は黒い服に身を包み、顔を見えないように隠してある……。

「アニス！何故来たんだ！？」

「いきなり爆発音が聞こえたから！」

「早く貴方は逃げなさい！！」

「ほう……こいつが、鬼神の子か……」

一人の黒服の男が、俺を見るなり、襲い掛かってくる。
ヤバい、反応が遅れっ……。

ガキン！！

「クッ！」

「アंक！」

「はぁ！！」

バキッ!!

アंकは右手だけどグリード化して、敵の攻撃を受け止める。

だが、そこは斬魄刀……幾ら異形の腕と言えど、受け止めたただけでダメージを与えられる力はある。

「アंक君！早くアリスを連れて逃げるんだ!!」

「私達がここを抑えてる内に！」

二人がそう言い放つが……お母さんの結界が、その一瞬の隙に破られる……。

「きゃあ！」

「アリス！」

「お母さん！」

「……飛ばせ、飛び魚」

シュン!!

敵が斬魄刀を開放して、お母さんを斬った瞬間……お母さんの姿がいきなり消えた……。

「そん……な……」

「アリス!グアツ!」

バキッ!ドガアッ!

そして、お父さんもお母さんが消えたことで隙が生じ、蹴り飛ばされる。

「貴方は殺しませんよ? 貴方達はクロイツベル一族の中でも、優秀な部類に入りますから……ただ飛ばすだけにします……」

ザシュッ!シュン!!

そして……お父さんも斬られ……飛ばされた……。

「お父……さん……？……お母さん……？」

その瞬間、俺は崩れ落ちた……。

俺が……俺が……出て来たせいだ……俺のせいで……お父さんとお母さんは……。

「安心すると良い、君の両親は、安全な所に飛ばしました……まあ、今から死ぬ君には、関係ない事だと思えますけどね？」

「お父さん……お母さん……」

バキッ！！

「アニス！逃げるぞ！！」

アंकが俺に近づいてくる敵を殴り飛ばして、俺の所に近寄る。

……アंक……。

「化け物は化け物と呼ぶ……ですか……良くこんな化け物と一緒に住めましたね、あの人達は……殺れ……」

「……………群鳥氷柱……………」

俺は敵に向けて、大量の氷柱を放つ……………氷輪丸、しかも正解の状態の攻撃をかわしたり、相殺したりする術も無く、ほとんどの者が、巨大な氷柱によって絶命した。

「う……………そだろ……………そんな……………馬鹿な……………」

いや、一人だけいた……………斬った物を何処にでも飛ばす能力でもあるのだろ……………お父さんとお母さんと飛ばした張本人は……………所々血が噴き出ていた。

「…………………………」

「ま、待ってくれ！止めてくれ！」

「……………黙れ……………竜霰架……………」

ザシュ！ピキピキ！！

「うああ！凍る！嫌だ！！嫌だああ！！」

ピキピキ……。

男は完全に氷に成り果てた……俺はその氷を殴り砕く……。それを終えた瞬間、正解は解けて、俺は倒れこんだ……。

「アニス！」

「アン……ク……」

「しっかりしろ！ただの魔力切れだ！」

「……アン……ク……お父……さんと……お母……さんが……」

「あの二人は生きてる！あの男が言っただろ！！」

「……なら……探さないと……」

俺はそう呟き、魔力切れで動かない体を、無理やり動かす……。だが、指一本とも、動こうとしない……言う事を聞かない……。

「今はまだ駄目だ！お前は既に、狙われる存在だ！ここに居ては、満足に動けない！ここは一回、身を隠すべきだ！」

「……でも……そうしたら……お父さんと……お母さんが……あいつらに……何をされるか……」

「あいつらなら大丈夫だ！約束したんだろ！？生きて、元気で、また再開するって！転移させる時点で、あの二人は言ってただろ！！」

「……アंकウ……」

俺は、自分の愚かさ、不甲斐なさのせいで涙した……。悔しい……。自分のせいで……。両親を危険な目に晒してしまったことに……。

「……アニス……」

アंकは俺の名前を呼びながら、俺をギュッと抱きしめる……。強く、強く……。俺が潰れるんじゃないかと思うほど、強く……。

「……安心しろ……。俺が……。お前を守る……。そして、お前の両親

も、見つけ出してやる……」

「……アंक……」

「俺はお前のパートナーだ！…何があっても、守ってやる！…だから、俺の手を掴め！…お前は、ここで終わるべき人間じゃないだろ！…アニス！！」

「……そうだね……」

俺は……覚悟を決めた……。
必ず、お父さんとお母さんを見つけて出してみせる……絶対に……。

「……お願い……アंक……俺を……連れて逃げて……計画通り……
……に……」

「分かった……行くぞ……」

そう言つて、アंकは俺を抱きかかえ、お父さんとお母さんが考えた計画を実行することにした……。

~~~~~

~~~~~

「ここか……」

「……うん……」

地下室……ここにはお父さんの所有物であふれかえっている。
その一つに、転移装置が置いてある……俺とアंकはその中に入り、
スイッチを押す。
だが、まだ魔力が十分に溜まってないのだろう……起動しない……。

「やっぱり……駄目……か……」

「……アニス、これって、他者の魔力を込めれる事って出来るのか？」

「……分からない……やった事……ないし……聞いた事も……無いから……」

「……だったら、試してみる価値はありそうだな」

数秒悩んでから、すぐにアंकは口を開く。

そして出た答えが、とりあえず魔力を装置に流すと言う事だった…。

「ハアッ！」

アंकは完全グリッド化をし、魔力を転移装置に思いきり流す……。
……すげえ……これがアंकの全力か……。

「グッ！まだか！」

「……もう……少し……」

ゲージがもう少しで満タンになる……後50……40……30……
20……10……。

「よし……溜まった！」

「クッ！ハア、ハア……俺も、魔力切れ起こしそうだ……」

そう言って、アंकはすぐに人間の状態に戻る。
まあ、一日二日掛けて魔力を貯める必要がある装置だしね……ア
ンクは頑張った……。

「もう設定はしてあるんだな？」

「……うん……大丈夫だよ……」

「それじゃあ、今度こそ……」

アंकは装置のスイッチを押す。
魔力が十分になったので、さっきと変わって、中の明かりがつく。
そして、装置が作動した……。

《転移を開始します……場所は、第97管理外世界。ただちに転移します……》

機械音が鳴る響く……。

ああ……意識が……瞼が重くなってきた……。

その瞬間……俺とアंकは、姿を消した……。

第五話 鬼神の伝説と、別れと誓い（後書き）

結局 good good

いやあ、長い長い……疲れた……

アंक×アニス……ありだと思います……

今回は……はやて視点からのスタートとなります

やっと原作キャラでお！！

そして、近況報告！

何と！

リトバスのラジオ、ナツブラで！

私めの投稿メールが！

あの、私の憧れの！アイドル的存在の民安さんに！

読まれたあああああ！！

……ああ、今日、月曜日に配信されたのを聞いて、
トークランキン
グの一発目で読まれたので吹いたwwww

いやあ、うれしいな……

そんなわけで、近況報告でした

では、読んでくださりありがとうございます

第六話 アニス、はやてと出会った事（前書き）

いやあ

今日は学校のプロジェクトでチーズ作ってたお

朝の六時半から学校に行って、そこから夜の六時半辺りまでずっと
作業

きつかった……眠かった……足が痛かった……そして明日もあると
言う恐怖

……泣きてえ……

つつわけで、本編始まります

第六話 アニス、はやてと出会った事

はやてサイド

「んっ……ふぁっ……」

いつもと変わらない朝。いつも通りの時間に起きて、ウチはベッドから降りて、車いすに乗る。

せやけど……何やるうか……いつもと感じが違う朝になりそうなのは……ウチの気のせいやるか……。

そう思いながら、リビングのカーテンを開けて、外を見る……。

「……はぁ？」

いつもと変わらない風景……の筈が……二人の人が……男女が倒れとるのが分かった……。

男の人は、女の子を庇う形で気を失っており、女の子は……さながら騎士に守られる姫の様に綺麗やった……。

「……アカン……神話の読み過ぎや……」

ウチは自分の目を擦り、もう一度外を見る。

「……やっぱり人が倒れとる〜!?!」

~~~~~

「……んっ……」

「ああ、どないしようどないしよう! やっぱり警察!?!それとも救急車!?!ああ、どないしよう!?!」

……何だこいつは……人の周りを車いすでグルグル回りやがって……。  
……。  
そついや……アニスは!?!……良かった、俺の腕の中か……。

「よいつしょ……」

くっ……転移装置に魔力を流し過ぎた……体が重い。  
俺はアニスを起こさないように起き上がり、そのまま抱きかかえる。

「あ、起きたんか!?!」

「少し静かにしろ。こいつが起きるだろうが」

「あ、……すいません……」

「……それより、ここは……」

見渡す限り、家があり……ここもどうやら、人様の敷地ならしい。  
もしここが魔法文化の無い世界なのだとしたら……なぜ、この家の  
中に魔力反応を感じるんだ？

「あの、大丈夫ですか？」

「……………」

少し訛りの入っている子供が声を掛けてくる……。  
そいつは足が不自由なのか、車いすに乗って、こちらを見上げてい  
る。

「ああ、少なくとも俺は大丈夫だが……こいつはどうだかな……」

アニスとは昨日の戦闘で、魔力を根こそぎ斬魄刀に持って行かれた。普通の奴なら半日は寝込むだろうが、こいつなら何時間かで目を覚ますだろう……。

「あの……」

「何だ？」

「急ぎじゃないんですたら、ウチの家で休んでいきませんか？」

「……………」

願っても無い提案だ……だが……。

こいつの家の中の魔力反応が気になるな……、一体、何を企んでる、こいつ……。

だが、欲望があるわけでもないし……その目には、悪意の欠片も移ってない……ただの善意か？

だとしたら、一刻も早く、こいつを休ませてやりたい……。

ここは、背に腹を変えられないか……。

「ああ、迷惑を掛けるな」

「なら、こっちから入ってください」

ガキが指を差す方には玄関があった。

俺はアニスを抱えながら、その玄関へと向かい、中に入る。

そして、外から戻ってきたガキがこちらに手招きをしたので、俺はそちらの方へ向かう。

「ウチの部屋で申し訳ないんやけど、寝かすならここの方がええ。他の部屋やと、少し準備に手間取ってしまうさかい」

「すまん」

「いえいえ、これも何かの縁ですし！」

「そうか……」

俺は部屋に入り、ベッドにアニスを寝かせ、掛布団を掛ける。

……これで先ずは一安心か……。

そう思いながらふと振り返ると……鎖で縛られて置いてある黒い本に目が映る。

これか……魔力の元は……こいつ、魔導師か？ いや、だったら俺達の魔力を感知できるだろう……。

「あの、どないしたんですか？ その本をじつと見つめて」



「っーいや、何でもない……」

「そうですか。あ、ここで話をしたら起こしまうな……聞きたい事もあるんで、リビングに来てください」

確かに、いきなり人ん家の庭で気を失っていたんだ……聞きたい事なんぞ山ほどあるだろうな。  
さて、何処まで話せるか……。

~~~~~

「うつ……くつ……！」

体が重たい……まるで、自分の体じゃない様だ……。
そんな体に、自分は鞭を打ち体を起こす……。

「知らない部屋だ……」

先ず第一声がこれ……。
何処だここ……つつか、見覚えがあるんだが……。

「それよりも……俺は一体、何でこんな所の……あっ！」

思い出した！

昨日の夜、襲撃されてお父さんとお母さんが飛ばされたのを見て激情し、正解を使って魔力切れを起こしたんだ。

そして、そのままアंकに抱きかかえられて、転移装置に乗って……地球に……。

「……そう言えば……アंकは？」

俺の近くには居ない……。

まさか……転移の時に離れ離れになっちゃったとか！？
そんなぁ……アंक……。

「……ぐすっ……アंकッ……ぐすっ……アंक……」

寂しい……お父さんもお母さんも何処かに行ってしまい、今度はアंकまで……。

お父さん、お母さん、アंक！

「アंक……。アंक……。……うわあああー！」

寂しい……あれほど近くに居た人達が、一日で一気に居なくなってしまった……。

「お父さん！お母さん！アंक！うぁっ…………アंकウ…………さみっ
しいよっ…………」

胸が苦しい……俺は、こんなに依存してたんだ……。
お父さんやお母さん以上に……アंकに……。

「アン……ク……！うぁっ…………！」

その時、この部屋のドアが開かれる。

俺は泣きながら、ドアのそこを向いた……そして、顔を出したのは……。

「おい、どうしたアニス」

居なくなったと思っていた……俺のパートナーの、アंकの顔だった……。

俺は無意識の内にベッドから出て、アंकに抱き着いた。

「アंकッ！」

「おっと！……どうした、いきなり」

「アंक！アंक！アंक！」

「ああ、俺だ！だから何回も俺の名前を連呼すんな！！」

「アंकうゝ……グスッ……アंकも、何処かに居なくなっちゃったと思った……よ……怖かったよ……！うあっ……」

「……泣いてんのか？」

「声の……感じで……分からないかな……？普通……グス……」

「何で泣いてんだよ」

「だって！だって……お父さんも、お母さんも……居なくなっちゃって……一緒に逃げ来たアंकまで、居なくなっちゃったかと思つて！」

「……はあ、俺がお前を置いて何処かへ行くと思ってたのか？バ―

カ」

そう言いながら、アंकは俺を抱きしめ返す……。

「お前を置いて何処かに行くわけないだろ。誓ったろ？お前を守るって、必ず両親を見つけ出してやるって」

「……アंक……」

……うし、少し落ち着いた……。

これで何とか持ちこたえれそうだ……主に精神的な意味で……。それより、ホントにここ何処なんだろうか？

「なあ、アंक……ここ何処分かる？」

「俺が知るわけないだろ。俺も気が付いたらここに居たんだ。詳しい話を聞きたいなら、リビングにここに住んでるガキに話を聞くと良い」

「ここに住んでるガキ？」

アंकサイド

取り敢えず、一旦こいつから話を聞かないと下手に動けないな……。アニスの事もあるし……。

「粗茶ですが、どうぞ」

「どうも」

ガキが出したお茶をすすり、俺は本題を切り出す。

「……何でお前の家の敷地で気を失っていたか、だろ？聞きたいのは」

「ええ、そうです」

「話せば長くなるが……俺達は少し、遠い所か逃げて来た……そういう解釈で話を進めるが、良いか？」

「……何や？駆け落ちでもしたんか？」

ブーッ！

俺は飲んでいたお茶を吹き出す……。
何言っただこいつ！ガキが益せた台詞言いやがって！

「なわけねえだろ！」

「だって、あんな小っこい可愛らしい子を抱きかかえて気を失ってたんやで？まるで姫を庇った騎士みたいにな。でも、あんな小っこい子と駆け落ちって……犯罪やで？」

「だから違っって言っただろ！人の話を聞きやがれ！！」

「あはは！冗談やて冗談。それで、何で倒れてたん？」

「ああ、実はな……さっき寝かした奴居ただろ」

「あの可愛い子やな？その子がどないしたん？」

「あいつ、良い所のお坊ちゃんなんだよ。それで、そいつの家がつい昨日襲撃されてな。俺はあいつと、命からがら逃げて、ここで気を失っていたんだ」

「……ちよつと待ちいな……」

やっぱ……信じられるわけねえか……。

まあ、いきなり突拍子過ぎて、着いていけるわけもないしな。

「あの可愛い子が坊ちゃん！？お嬢様や無く坊ちゃん！？あの子男の子やったんか！？」

「気にするとこそこか！！」

「当たり前や！女のウチよか女の子らしいで！？世の中不公平やわ！！」

「まあ、お前よりは可愛いと俺は思うが……って、俺は何言ってるだ！」

ヤバイ……あいつのせいで狂って来たな俺……。

「それで、その子が命を狙われとる事やけど」

「サラッと本題に入りやがったな……」

「行く宛とか無いんやったら家に住まへんか？一時身を潜めるつもりで」

「……それを俺に言われても、決めるのはあいつだし。それに従うのが俺だ」

「結構な忠義心やな」

「はっ、あいつしか仕える奴が居ないんだよ。さて、少しあいつの様子を見に行ってくる」

「分かったで」

俺はそう言っで、さっきガキに案内された寝室に向かう。
向かったのだが……。

「お父さん！お母さん！アंक！うあっ……………アंकウ……………さみっ
しいよっ……………」

……ああ、明らかにあいつ引きずってんなこれ……………はあ、相変わらず、戦闘は強いが、精神的に駄目な奴だ。
俺は内心でため息をつきながら、ドアを開ける。

「おい、どうしたアニス」

部屋に入り、アニスに声を掛けた。
その瞬間、アニスはベッドから飛び出て、俺に抱き着いてくる。

「アンクッ！」

「おっと！……どうした、いきなり」

「アンク！アンク！アンク！」

「ああ、俺だ！だから何回も俺の名前を連呼すんな！！」

「アンクうゝ……グスッ……アンクも、何処かに居なくなっちゃったと思った……よ……怖かったよ……！うあっ……」

何でこいつ……こんなに泣いてんだ？
まさか、いきなり俺が居なくなつたせいかな？……はあ。

「…………泣いてんのか？」

「声の……感じて……分からないかな……？普通……グス……」

「何で泣いてんだよ」

「だって！だって……お父さんも、お母さんも……居なくなっちゃって……一緒に逃げ来たアंकまで、居なくなっちゃったかと思っ
て！」

案の定だ……こいつは……。

「…………はあ、俺がお前を置いて何処かへ行くとってんのか？バ
カ」

そう言いながら、俺はアニスを抱き返す……。
全く、俺は男だぞ？簡単に抱き着きやがって……っと、こいつも男
だったな。

「お前を置いて何処かに行くわけないだろ。誓ったろ？お前を守る
って、必ず両親を見つけ出してやるって」

「……アंक……」

何であんな恥ずかしい事を言っただと思っただこいつは。もう絶対、お願いされても言いたくない台詞だ……。はあ、やれやれ……。さて、どうしたものかな……。

「なあ、アंक……ここ何処分かる？」

「俺が知るわけないだろ。俺も気が付いたらここに居たんだ。詳しい話を聞きたいなら、リビングにここに住んでるガキに話を聞くと良い」

「ここに住んでるガキ？」

「ああ、行くぞ」

俺はそう言っで、アニスを抱きかかえる。

「ちょっ！？何で抱きかかえるのさ！？」

「うるさい、昨日魔力切れ起こした奴が何言っただ！良いから黙って大人しくしてろ！」

「……あーうー……」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「どうも……アニス・クロイツベルと申します……」

「これはご丁寧に、八神はやて言います。宜しゅうお願いします」

……結論、ここは地球で海鳴市であり八神家でした……。  
まあ、何という確率……俺に幸運EXでも付いてるんだろうか？

「あの、アंकと何処まで話しましたか？」

「アंक？ああ、この人の事やな。まあ、君がお金持ちの坊ちゃん  
って事と、命を狙われてるって事までや」

「ま、まあ……大まかに説明するとそうかな……あはは……」

アंकめ……。

俺はアंकをキッ！と睨むが、顔を背かれてしまった……。

「それで、その、アंकさんにも話したんやけど。身を潜めるって事で、しばらく家に住まへんって言ったんやけど。アंकさんには決定権が無いって言われてもって、決めるのはアニス君だって」

「まあ、そうだろうね……」

うん……。

まあ、命を狙われてる事は間違いないけど、あの次元世界内の事だけだし……ここには被害はそう起きないだろう。

それに、住むところは愚か、お金もないし……家なき子だしね……。

「……本当にここに泊めてもらっても良いのでしょうか？」

「ええ、ウチは構いませんよ。どうせウチだけしか住んでへんしな」

「あつ……ごめんなさい……」

「うん、気にせんといてアニス君。もうウチは気にしないさかいに……それで、どや？」

「……あの……不束者ですが……よろしくお願いします……」

「……………使い方間違うとるよ……………アニス君……………」

「えっ！？あれ？違うの！？……………はう……………」

「はやてサイド」

何やねんこの子！可愛すぎやろ！

間違い指摘されて、恥ずかしくて顔赤うしとる……………アカン……………可愛すぎる……………。

こんな子が男の子や何て信じられへん！どっからどうみても女の子やん！

「あ、あの……………八神さん？」

「はっ！ど、どないしたん？アニス君」

「いや、いきなり俺の顔をじっと見て固まってたから……………気になっちゃって……………」

「あ、あはは……………な、何でもあらへんよ？気にせんといて？」

「う、うん……分かったよ八神さん」

「それ」

「へっ？」

「その八神さんっての、何か他人行儀で、ウチは好かんねん。ウチの事ははやてでええよ？ウチはアニス君って呼ばせてもらっとるから。それと、敬語も無し！今日から一緒に住む家族やからな！」

「八神さん……」

「アニス君……？」

「あ……は、はやて……ちゃん」

そう言つて、アニス君は恥ずかしそうに頬を染めながらウチの名前を呼ぶ。

つ~~~~~~~~！可愛い！何やねんこの子！？ホンマにかわええ！

それに、ウチより年下なのに、こんなに行儀がええとわ……偉いな





可變すぢろおおおおおおお！……！

## 第六話 アニス、はやてと出会った事（後書き）

最後ははやての心の叫びで終了

やっぱりはやては二期の頃が一番可愛かった!!

何故だろう？三期のはやてには一向に萌えられなかったんだ……

それにしても、明らかに腐臭が……まあ、アंकは落としますよ？

つつか、絶賛無意識攻略中ですアニス君

この中で攻略が難しいのは明らかアंकです

つつかしよっぱなから八神節が……

でもはやては可愛いので良いのだ!!

さて、ここから守護騎士達が出てくるまで日常&儀式編かな？

では、ここまで読んでくださり、ありがとうございました

## 第七話 意外な所で過去との決着（前書き）

はい、今日もチーズを作っております

やっぱりしっかりしたものを作るには、大変な工程を踏むんですね……

しかも、コストも掛かる……

牛乳40？を使って出来るチーズは大体4？

10分の1です

そして、価格を計算すると

大体牛乳の値段が？35円だとすると

40×35は1400円

価格だけ聞くと、あんまりコスト掛かってないじゃんとか思いますが

酪農家にとっては、結構な額です

だから、家の牛乳を使って作ったので…… 1400円もらったと言  
う事になります

それに、光熱費、水道代なども含まれる、加工食品は……すっげえ  
金使う……もうパネエは位な感じですねはい

さて、あんまし為にならない話をしてしまいました

本編始まります

## 第七話 意外な所で過去との決着

「ほな、買い物行こうか！」

唐突に、はやてが言い出す。

「買い物？」

「そや、ここに住むんやったら、ある大抵の物は必要になるやろ？」

確かにそうだ……。

俺らは荷物を整理する前に逃げて来たから、持ち物はデバイスと、魔法で空間にしまつてある魔具位の物だろう。

それに、今着てる服も、ここ日本ではかなり浮いている。

「あ、でもアニス君……命狙われとるんやつたな……」

「あ、それなんだけどさ。それはただアंकが大げさに言ってるだけで、実際は家でして来ただけなんだ、それで、ボディーガード達が捕まえに来る、とかそんなだからさ、気にしないで」

「そ、そやつたんか？もあ、アंकさんあんな大げさに話すからつ

「いつい信じてもうたわ」

「あはは、ごめんね。それで、買い物何だけど。行くよ、僕も逃げて来たから、必需品持って来てなくて」

「やろうなあ。ほな！ご飯食べたら行こうか！アンクさんも、それでええな？」

「ああ、俺は別に構わない」

「あ、でもお金無いんだっけ……あつたとしても、あっちのお金だから使えないんだけどね。  
さて、どうしたものか……」。

「あ、アニス君今、お金の事心配したやろ？」

「なっ！？読まれた！？読心術か！？すごい！はやてすごい！おっさんの次にすごい！」

「ドゥー！」

「むぎゅっ！」



「キャラ崩れてるぞ、いい加減その癖直せ」

「……あ……ああ……し、身長が縮む……」

「あ、あはは……アंकさん、あんまりアニス君を殴らんとって、暴力は禁止やで？」

「……あ、今0.5m縮んだ……」

アंकに頭を殴られたせいで身長が少し縮んだ……解せぬ！

それにしても、良い拳骨だった、まさかこの年で拳骨されるとわ……

……いや、普通か。

「お金の事は気にせんでええ、ウチの親戚の人が、結構な金額のお金を送ってくれるんや。でも、こんな体やから、そんなにお金使わねん。せやから貯まる一方でな、ウチ一人やと使い切れんのや」

親戚……ギル・グレアムか……。

あいつ、俺嫌いなんだよね、多くの犠牲より小さい犠牲ってのは良いけど……ただの復讐心に駆られてる奴のは、どんなに言葉を並べても復讐にしかない。

しかも、はやては関係無いだろ。はやても被害者だろ……。

「ん……でも……」

「気にせんでええって。無一文なんやろ？せやったら頼ってえな」

「……取り敢えず、返す手立てがないので体で払います……」

バキッ！

「ガキが益せたこと言ってんじゃねえ！」

「またもやアंकの拳骨……」。

「だから背が縮むから止めろと……また縮んだじゃねーか……」。

「じ、冗談だよ……一々殴らなくても……」

「あっははは……さ、朝ご飯にしようか」

「そう言っつて、はやては車いすで移動してキッチンに向かう。やっぱり、車いすだと不便だろうな……」。

「はやてちゃん、手伝うよ」

「あ、ありがとうな、アニス君」

「ほら、アंकも手伝って」

「はあ……」

そんなこんなで、居候始めました……。

はい……体で払う云々は、一応バイトして稼ごうと思ったんだけど……このナリと年齢じゃあ無理だわ……翠屋は……客寄せパンダになりゃ行けんじゃね？

男の娘がウエイトレス！とかさ。

へ？女装っ気？無いですけど何か？

「あ、アंकお皿出して」

「この戸棚で良いのか？」

「あ、大丈夫ですよ」

「アंक、箸出して」

「この引き出しに入ってるか？」

「はい、合ってますよ」

「アंक「お前も何か手伝え！」 えへへ、バレちった」

まあ、当たり前だね。

それにしても、やっぱりはやては料理上手いな。

「さて、盛り付け盛り付け」

「あ、それ俺がやるよ」

「そか？ならお願いするわ」

盛るぜえ、超盛るぜえ！

とは、流石にいかないよね……限度って物があるし。

「さて、運びますか」

お盆におかずやご飯を乗つけて運ぶ。  
後は色々と用意をして、席に着く。

「ほな、いただきます」

「……いただきます」

あれだ、いつも家ではトリコ風の挨拶をしていたから。  
俺とアंकは少し戸惑ってしまったんや……。

「……もぐもぐ……」

「あ、あの……どや？」

「……うん、美味しいよはやてちゃん」

「そっかー、安心したで」

うん、マジで旨い……ああ、何年振りだろうか……日本食を食べる  
のは……。

アニス感動……うめえうめえ……味噌汁うめえ……。

「またそうやって汁物ばかり……野菜食え野菜」

「うるさい、年がら年中アイス食ってる奴に言われたくないよ」

実を言うと、俺は汁物系の物が好きなのである。

味噌汁、スープ、ラーメンやうどんやそば……まあ、汁入ってりや何でも行ける。

「ホンマに二人は仲良しさんやなあ」

「まあな。こいつとはもう九年の付き合いになる」

「へえ、産まれた時から一緒何か」

「そうなるな」

「アंकったらこう見えてすっごいお節介焼き何だよ？この前何で俺がちよっと擦りむいただけ何に、いそいそと消毒液と絆創膏片手に走って来たんだよ」

「あはは、アंकさんもアニス君が大好きなんやね」

「ふん……」

あ、顔背けた……もう、照れちゃって。

この九年間で見つけたアंकの癖。それは照れたり嬉しい事があったりすると、こっやって顔を背けるのだ。

「あらら、嫌われてもった」

「違うよはやてちゃん。顔を背ける仕草をする時は、決まって照れてる時だから」

「アニス〜！」

「うわっ、こわっ！めちゃくちゃ怖い！いや、くちゃくちゃだ！くちゃくちゃ怖い！あはははー！」

「ったく……」

「冗談だよ冗談。怒らないでよ〜アंक〜」

「ふん……」

まあ、これは怒ってると言うより、少し呆れてる感じかな？  
でもいつもの事なので、気にしない。

「ごちそう様」

「あれ？アニス君もうええの？」

「うん、もうお腹一杯」

「ったく、そうやって汁物ばかり飲むから入らないんだよ。今度からちゃんとした物を食え」

「いや、汁物もあるけど、食が小さいから仕方ないじゃん」

それに、この体結構燃費良いしね。  
あんましカロリー使わないし、良いね、低燃費……今はやりの低燃費……略してTNP。



「だから背が伸びないんだ」

「まあ、背についてはどーでも良いけどね」

だって、大きくなっちゃったらアंकに抱っこしてもらえなくなるもん！

人間は、いつまで経っても甘えたいものなんだよ……。

それに、神様に頼んで背はあまり伸びないようにしてもらってるし。

「でも男の子なんやから、やっぱり背えは大切やで？」

「まあ、そうだけとさ〜」

「八神の言つとおりだな」

うるせーアंक……。

「んじゃ、ちょっと腹ごなしに動いてくる〜」

「あんま激しく動いたら腹痛くすんぞ」

「分かってるよ。あ、はやてちゃん、庭借りても良いかな？」

「何をするのか分からへんけど、まあええよ」

もう何かいつものものが体に染み込んでるんだね。  
訓練とかしてたし、仕方ないか……。  
そう思いながら、俺は庭に出る。

~~~~~

「ハッ！フッ！」

一応軽くシャドーをしてるお。

とは言っても……決まった型とかは持っていないんだけどね。
強いて言うなら、自分の魔力を爆発させて相手に流すとか、ぶつけ
るくらいしか出来ない。

あれ、ソウリイターの魂威みたいな感じかな？

「ふう……良い汗掻いた」

パチパチ！

拍手が聞こえたので、俺は家の窓の方を向く。
そこにははやてが顔を出して拍手をしていた。

「ありや、見てたの」

「まあ、居間の前でやられてれば、見えてまうで」

「確かに」

「はい、タオル」

「ありがとう」

俺ははやてからタオルを受け取って、汗を拭う。
うむ、我ながら惚れ惚れするのう……この髪の毛……。

「それにしても、アニス君髪の毛結構長いな。切らんの？」

「いや、短くしようと何度も試みたけど。その度にお母さんに止められるんだ。勿体ないって」

「あはは、ウチもよう分かるわ。アニス君の髪、綺麗やもん」

「ありがとう。結構大変なんだよ？手入れとかさ」

「せやろな。流石にウチもそこまで伸ばした事無いから、実際は分からへんけど」

「因みにアंकも今の髪型が良いって言って止めてくるんだ」

「ほんま、アंकさんはアニス君の事好きなんやな。でも……流石に犯罪やで……」

「あはは、犯罪って。そもそも俺は男だし、アंकにしてみても、対象外でしょ」

「そやね」

俺とはやては話しながら笑う。

今日出会ったばかりなのに、何でこんなに話が弾むんだろうか？

「さて、運動が済んだなら、買い物行くで？」

「うん、分かった」

~~~~~

「すんまんなあ、押してもらって」

「ガキが何遠慮してんだ、少しは大人にも頼れ」

「あはは、ウチも言われてもった」

「あれは嫌な事件だったね……」

まさか車いすを押そうと思ったら、車いすと少ししか身長が変わらなくて、押せなかったとか……。

車いすの長さは、大体90〜100?が一般……まあ、はやてのも一般の車いすなんだけど……。

まさか俺、100?位しかないとか……。

まあ、身長何て無くてても良いし、戦闘に有利だから良いんだけどね！

「まさか車いすも押せないほど小さいとは、俺も思わなかったぞ…

…」

「うん、俺も……」

あつちの世界では背を測るだのの概念があまり無い。  
故に、俺は今の今まで自分の身長を知らなかった……。

「ウチでも130?程度やねんけど……」

「30?の差とか……アंक……マジデカイ」

アंकは大体170強つてところかな?  
70?さか……まあ、嫌いじゃないわ!!

「さて、先ずは服買おか」

「いきなり高く付きそうな物を選んだね……」

「大丈夫や、安く手に入る場所があんねん」

「へえ、どんな店なの?」

「しま〇ら」

……あのやつすくて、大きい服も取り扱ってる店か……。あそこ、結構良い感じの服とか売ってるから好きだわ。某水原薫さんって人も大好きなしま〇ら……。

「あ、ここやここ」

そこにはマジでしま〇らと書いてある店があった……。

だが、平日だから、そこまで人が居ない。つか、は yet は常連だから大丈夫だろうけど、俺とアंकは何て言われるだろうか……。

今の時間は学校の時間だし……って、アंकより俺じゃん。アंकは大人だし、良いのか。

「ほな入ろうか」

そう言つて、は yet はアंकと一緒に店の中に入って行く。

あ、置いてかないでよぉー！

俺はすぐさま二人を追いかけるために走りだす。そして、店の中に  
in。

「うわぁ、凄いいっぱい売ってるんだね」

「せやろ？」

「あ、ワイシャツ発見。おっ！スパッツもある！寝間着確保！！」

「ちょい待ち！」

「ん？どうしたのはやてちゃん」

「それが寝間着何か！？ボケやろ！それは関西出身のウチの対してのボケやろ！！」

「いや、ボケじゃないし、ふざけてもないよ？これが俺の寝間着」

「…………ホンマに？」

「諦める八神、こいつはここに来る前もそうだった…………」

ああ、アंकが遠い目をしてる…………何か辛い事でもあったんだね。それにしても…………ここのし〇むらは凄いな…………。



何かコスプレの服も扱ってるよ……。

あ、今某腋巫女の巫女装束があった……。すげなこ……。

「……アニス……まさかあれ着たいとか思ってたんだろうな？」

「そんなわけないでしょアंक。第一、俺に女装っ気は無いし、サイズがないでしょうに」

「あ、100?の超絶口リ使用って書いてる奴がある……」

「はやてちゃん、それをすぐこっちに持ってくるんだ……」

「言ってる事がさっきと違うじゃねえか!..」

「あはは、冗談だよ冗談。ほら、はやてちゃんも冗談で言ったんだしさ」

「いや、ホントにあるねんけど……」

「なん……だと……」

どうやら俺の知ってるしまむ〇は……死んだようだ……。  
何でこんなこんな物を売り出そうとしたし……。

「あ、あれは……」

少し遠めの所に、キチツとした服が、一式飾られてある。

「ほお……懐かしいな」

アंकは俺の視線に気づき、その服の所まで行き、それを見る。  
そう、その服とは……オーズ本編でアंकがいつも着ていた服があったのだ。

「……懐かしい、ね」

「何だアニス、悪いか？俺が懐かしいと思っちゃ」

「べっつに」

少しムフフとなっただけやねん……。  
まあ、気にせんという……。

「アंकさん、その服がええんか？」

「……………」

アंकはその服をじっと見る…………昔を懐かしがっているのか…………その目は今を見ていない。

過去を見ている……………そう言う目だ……………。

そして、アंकは一回視線を逸らし、フツと、自嘲気味に笑い。

「いや、他を探す」

そう言って、アंकは他の所に行ってしまう……………。

……………過去と、決着付けたのかな？

アंकサイド

「はあ……………」

こんな所で、まさか……………昔の事を思い出すとは……………。

映司……………比奈……………伊達や後藤……………今思うと……………あれはあれで、結構面白い奴らだったと、そう思えてくる。

特に、映司……………。

（楽しんで助かる命が無いのは、何処も一緒だな……）

（人の命より、メダルを優先させるな！）

（ありがとう……アंक……）

「っ！……ああ、そうか……」

俺は、まだ捨てきれなかったんだな……。  
あいつに、掴む腕は俺じゃないと言っておきながら、俺はあいつの腕を、まだ掴んでいたらしい……。

「アンクー！」

「……………」

ふと物思いに耽っていると、いつもの声が聞こえた……。  
俺は後ろを振り返り、そいつを見る。

「もう、どうしたのさ？」

「何がだ？」

俺のパートナー、アニスが、そこに居た……。

「捨てきれないんでしょう？」

「……まあな」

「……俺じゃ、頼りないかな？」

「……………」

「別に、俺の為に、その思いを捨ててくれとは言わないよ。そんなのは、ただのエゴだ。確かに、俺は映司みたいに、強くは無いよ……精神面で、アंकには凄い迷惑を掛ける……戦闘も、アंकのお荷物になっちゃうけど……その……俺も頼ってよ？」

「……………」

「アंकは俺を守ってくれてるって言った……俺、すごい嬉しかった」

たんだ。あのアंकが、俺の事を思ってたんだって……」

……思い出したくもない事を……。

だが、確かに俺は言った……その事実は揺るぎない。

「だから……こう言う事位しか言えないけど……俺にも頼ってよ？俺はっかり、アंकに守ってもらってばっかじゃ、嫌なんだ」

その言葉一つ一つ、俺は聞き漏らさずに聞く。

「だから……頼ってよ。俺が迷惑かけちゃう分、俺にも迷惑掛けてよ。ね？だから……うわっ……」

全く……俺より小さくて、頼り甲斐が無くて、馬鹿ばっかする奴だけど……。

言葉だけは一人前な奴だ。

「アーン……ク……？」

「バーカ、誰がお前に迷惑掛けるかってんだ。もう少し、大きくなつてから言え」

俺はそう言いながら、ワシャワシャとアニスの頭を撫でる。

「身長は関係ないでしょっ！」

「大ありだ。そんな小さい奴に、頼ってくれって言われても、困るだけだ」

「酷くね!？」

「……気にすんなよ」

「え……?」

「お前は今のままで良いんだよ。俺に迷惑掛けるとか、掛けれとか……そんなのはどうでも良い。俺はお前さえ居れば、それで良い……それが俺の生きて行く理由になる……」

「……アंक……」

全く、調子狂うな……。

いつもこの調子だ、こいつは……何か突拍子もない事やるくせに……何でこう言う時だけこう何だか……。

「えへへ、アंकに頼られちゃった」

「？俺は頼った覚えは無いが？」

「だって、アंकは俺が生きてるだけで、生きる理由になるんでしょ？だったら、俺がずっと生きてなきゃ。ほら、俺を頼ってる！えへへ……嬉しいな」

「…………ふん」

ドガッ！

「った……！」

アニスの頭に置いていた手を、手刀に変えて振り下ろす。

「お前を守るのが俺だって事、忘れんじゃねえ」

「…………だ、だからって…………チョップしなくても…………」



「ふん……それじゃ、俺は服を選びに戻る」

まあ、精々頑張つて守るとするか。  
小さい小さい……大事な欲望<sup>アニス</sup>を……。

~~~~~

アニスサイド

「いやあ、いっぱい買ったなあ！」

あれから俺達は、日用品やら何やらを買い。
さっきまで今日の夕飯の材料を買っていた。

「はやてちゃん、何作るの？」

「ん、今日は家族が出来たお祝いって事で、色々や！」

「そっか、色々か。楽しみだなあ」

「ああ、そうだな」

「……………」

「どうしたアニス。鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をしてるぞ？」

「……………アंकがそんな事を言うようになったとは……………俺聞いてない……………」

「一体どうしたんだアंक……………お前が楽しみて言うの……………初めて聞いたぞ……………」。
「いや、実際は言っていないが、同意をしたのは初めてだ……………」。

「何だ？俺が夕飯を楽しみにしちゃいけないのか？」

「えへへ、いや、嬉しくて。やっとアंकが素直になったんだなつて」

「俺は素直だが？」

「どーだか」

「はいはい、その二人。イチャイチャ禁止やで禁止」

「イチャイチャ何てしてねえ！」

「アंक……酷い……」

「お前も乗ってんじゃねえ！」

ドスッ！

「あふん!!」

アंक は チョップ を し た。

アニス に 100 の ダメージ を 喰らわせた。

……今何か頭の中にモニターらしきものが……気のせいだろうか……。
……じゃっかんドラクエ風だった気が……。

「変な声出すな！」

「……やっぱアニス君……女の子やないんか？どやったらそんな高い声出んねん……」

俺もそれは知らない……もしかして俺、変声期にスルーされたりすんのかな？

まあ、こんなナリで若本みたいな声とか、小杉さんみたいな声は嫌だし……それはそれで良いのかなあ……。

「良いもん！はやてちゃんとイチヤイチヤするし！！」

「へっ？ウチ！？」

「oh……まさか、はやてちゃんに嫌がられるとは……」

まあ、当たり前だろうね。会ってたかだか数十時間。まだ一日すら経ってないと言う……。

でも少しショックだね……原作キャラにはなるべく嫌われたくないお……。

「いや、嫌と言うか……そこでウチに振られた事に驚いただけや」

「何だ、そうだったのか。なら安心したよ」

「……やっぱ、アニス君は可愛えなあ……頭撫でたる」

「えへへ、何か知らんが褒められた」

「……はあ、男が可愛いとか言われて喜ぶなよ……」

あら、俺はカツコよさより可愛さを追求してます故。

だってこんなナリの奴がどう足掻こうと、可愛いに変換されるに決まってんじゃん。

まあ、そんな容姿を選んだのは、紛れもない自分自身何だけどね。

「ほな、さっさと帰って料理作ろつか！」

「賛成！」

「まあ、もう少しで陽が暮れそうだしな」

そう言って、アंकははやての車いすを押し始める。

くそう……先ず一番の問題は……どうやってはやての車いすを押す

かだ……。

これは……手ごわい相手になりそうだ！

第七話 意外な所で過去との決着（後書き）

声優、水原さんも御用達のしま〇ら

俺も結構重宝させてもらってます

あそこ、結構大きなサイズあるから好きやねん

……あ、ピザじゃないよ？

ちよつと、小学生の時に、水泳、野球、空手、サッカーなど、色々な少年団に入り、野球は部活で入り

平日の月・木、野球、水泳、空手をやり

他の平日、火・水・金では野球とサッカーをやり

休日は土曜に野球と空手、日曜日は野球と……何か小学生がやるにしちゃ、マジで体を壊しかねない様な事やってたら、筋肉がヤバい事になりました

腹筋割れてます……ふくらはぎの筋肉もマジありえねえって感じになってます……

しかも筋肉質な為余計に……

っと、また話が……

それにしても、はやて可愛いな

あ。感想とかで、アニスにしてほしいコスプレを受け付けます

二期が終わった後の日常編で、腋巫女のコスさせてえな

たぶん東方とかが多いと思います

だから、どしどし他のコスを送ってください！

では、今日はこの辺で

読んでくださりありがとうございました

第八話 アニス、魔王と出会う（前書き）

いや、疲れた

今日は町のイベントで着ぐるみ着てガキどもの相手をしてました

駄目だ、子供嫌いだわ俺

二次なら許せるが、リアルだと無理あるね

はい、本編始まります

第八話 アニス、魔王と出会う

アニスサイド

「朝」

「……………ん……………ふぁ……………」

やあ、おはよう……………どうやら朝の様です……………。

朝はあれだ、嫌いだ。朝が苦手なのだ……………口調も定まらないし、思考も変な方に行くし……………。

「……………顔……………洗お……………」

とりあえず、目を覚まさせたいので、予めはやてに聞いていた洗面所の場所を目指す。

確か、リビング通って行かないとなかったはずだ……………。

俺は何の躊躇いもなく、リビングのドアを開けた。

「あ、アニス君おはよ……………」

入った瞬間、挨拶をしようとしたはやてが固まった……………。

固まんなし……俺の顔に何か付いてるのかな？

「……ななな……何やねんその恰好は！！」

「……ふえ……？」

格好？……ああ、この寝間着か……これはワイシャツ、継ぎ目すら無い綺麗なフォルムだろ？

いや、継ぎ目はあるんだけどね……ああ、変な事しか考え付かん。

「誘つとんのかー！！」

「……誘う？……何に……？」

「……ウチ……やってけるかな……」

なんかはやてが遠い目をしだしたよ？何か辛い事でもあったんだね。今度和菓子買ってやるから元気出せコノヤロー。

「……顔洗ってこよ……」

はやてが何か悩んでるみたいだからそつとしいてあげよう。
あア、俺って何て気遣いが上手いんだろうか！流石俺！自画自賛してやんよ！

「……ふあ、アंकおふあよ……」

「……取り敢えず一発殴らせろ」

「え……何で……」

ドコッ！

「つつう……何すんだよ！？これ以上俺の脳細胞を死滅させないで！俺の脳細胞のライフはとづくに0よ！」

「何でそんな恰好でうろついてんだ！普通の服着てから起きて来い！」

「……もしかして、アंक以外の人に肌を見せたから怒った……オケー、冗談だよアंक。だからその手に持っている包丁を降ろそうか……ゆっくりとだ……」

あぶねえ、何で包丁持つてんのか不思議だけど。包丁を握ってるア
ンクにだけは、冗談は言わんとこ。
たぶん本気で切り刻まれるから……。

「取り敢えずアンの拳骨で目が覚めたので、顔を洗う必要性が無
くなったわけだ。んじゃ朝ご飯の用意でも……」

「だから服着て来い！目の毒だ！」

「酷い！アンはこの恰好がお気に召さないのね！？だったら下の
スパッツを脱ぐわ！……オーケーアンク……その両手に持つてる出
刃包丁と良く熱されたフライパンを降ろそうか……ゆっくりとだ……
……」

ヤバイヤバイ、ついネタに走ってしまった。
さっき包丁持つてるアンクにネタを振るのは駄目だと学習したはず
だぞ俺。

次やったらたぶん命は無いぞ俺……少し落ち着こうか……。

「つつ訳で昨日買った服に着替えてきまーす」

仕方ないよね、アンクが止めろって言うんだし。
それよりもさつきからはやてがうんうん悩んでるのは、俺のせいでは
ない筈……。

さて、服でも着ようかね。

く割愛く

「アンクく、服着て来たよ。似合う似合う？」

「ああ、似合ってる似合ってる……」

ちよつ、明らか棒読みやんけ……。

アニス悲しい。それよりも、まだはやては何か悩んでるわけ？

さつきからぶつぶつ言ってるけど……時折変な言葉も聞こえて来るけど。

「……アカン……ここは鋼の精神や……間違い起こしたらアカンでウチ……まだ会って二日目……」

……これってスルーしてもオーケーな感じだね。

そして、誰かツツコンでよ！今の俺の格好、スパッツに上半袖だよ！？ツツコンでよ！

仕方ないのでパーカーを着る……ちえつ、誰かツツコンでよ……。

「おいアニス、皿出してくれ」

「あ、分かった」

取り敢えず俺も気にしない方向で行く事にした。
カオスな八神家だねこれ……。

~~~~~

「んじゃ、俺この町探索して来るわ!」

「お前一人でか?」

「うん!」

「……何か心配になってきた……」

とりま朝ご飯食べて少し経った辺りです。  
少しこの町の事を知るところ……特に翠屋行きたい。それに、大体  
今原作に入ってるのか入ってないのか知りたいしね。

「まあまあアंकさん。アニス君なら何とかなるから大丈夫じゃないか？」

「いや……こいつだったらフラッと誰かについて行きそうだから怖いんだ……」

「んな訳ないつしょwww。今日は休日だから、怪しまれずに行動できる！こんな日を逃してなるものか！という訳で、行ってきます」

俺はスタツと立ち上がり、そのまま玄関の方に駆けて行こうと思った瞬間。

アंकに腕を掴まれて動きを止められる。

「キャッ！？な、何だよアंक！びつくりするじゃんか！」

「までアニス。お前、まさかその恰好で行く気じゃないだろうな？」

「……へ？駄目？」

「当たり前だ！スパッツ脱いで普通のズボン穿け！」



え、お気に入りのにスパッツ……。

こんなに動きやすい物は二つとない！……いや、ブルマも動きやすかったな……確か。

よし、今度はそれで行こうか。採用。

「良いじゃんか別に。こんなチンマリした九歳の男の娘に欲情する変態ロリシヨタコン野郎がこんな真昼間から出るわけないじゃん」

「そんな事心配してねえ！俺は世間体を考えて言ってるんだよ！」

「……ああ、確かに。このまま出れば近所の人に目が付き、尚且つアंकが外に出れば……アंकがこんな格好させてるのかと、有らぬ誤解を生み、そのままアंकは刑務所行きか……それは避けた  
い」

「何で俺のせいになるんだよ……！」

「だって、アंकしか大人のいないじゃん。あ、そうだ！いつその事はやても履かない？スパッツ」

「いや、ウチはどっちかって言うとブルマの方が……」

「八神も真面目に答えてんじゃねえ……！」

「一々うるさいねえ。人の格好にとやかく言わないの！めっ！だよ！まあ、仕方ないので、そこは譲ってやったよ。真面目にズボンを穿いたぜ……ちくしょう……」

「スースーするの……」

「普段スパッツばっか穿いてるからだ！」

「……ズボンの中に穿いちや駄目？」

「駄目だ」

「ブーブー。分かりましたよ！んじゃ、行ってきまーす」

少し不機嫌モードなアニスたんのお通りですよー。

「……アंकさん、良く耐えられますね？」

「何がだ？」

「ぶっちゃけ、アニス君に欲情したりせえへんのですか？」

「ブーッ！……するわけないだろうが！あいつは男だぞ！？お・と・こ！分かってるのかお前は！」

「いや、アニス君可愛いし。たまに何かの手違いで欲情せえへんかな」と

「ガキがそんな事言うんじゃない！」

アニスが出て行ってから、直後の語らい。

二人とも危ない話をしてますね、ツツコミが来い。

アニスサイド

「ふんふん」

良いねえ、こうアスファルトの上を歩くと、日本なんだなと感じるよ。

まあ外国もアスファルトだけだね……。

「ここが海鳴市かあゝ、すげえなゝ」

自然は少ない物の、それを補う海があり。

公園にはそれに見合う自然がある……つつくしー、調和だ。まさに  
ハーモニーだ！

「らんらんらん」

いやゝ、つつい鼻歌を歌いたくなっちゃうねこれ。

こんなに気持ちの良い朝は初めてだよ。さて、先ずは何処に行こう  
かなゝ。

「あ、ぬこだぬこ。おいでゝ」

「にゃゝ」

おっ、寄って来た！何だこいつ！甘えるぞ！？

可愛い、むっちゃ可愛い！あっ！指ぺろぺろした！ああゝ、可愛い  
なゝ。

「えへへゝ、何だコノヤロー。可愛いなコノヤロー」

飼いたいな。でも、八神家にはもう少ししたら犬が来るしな。  
あ、犬じゃなかった、狼だっけ？まあ、変わりはない。

「んじゃなぬこ」

「にゃ」

俺は名残惜しいが、ぬこと別れを告げた。

くそっ、可愛いぬこだったぜ……お持ち帰りしたい！っが！たぶん  
アंक辺りに、元の場所に反してこい！って突っぱねられそう。  
アंकのバーカバーカ。

「さて、目的地を絞ろう」

まあ、翠屋位しか行く所ないだろうな。

まだなのはと会ってないし、フェイトも今居るか分からないし。  
それに、原作も始まってるのが始まってないのか……それが今一番  
気になってる事。

「しょうがないし、もう翠屋行っちゃうか」

友達かはやてしか居ないし、ちょうど良いか。

なのはとも友達になろうかね……ああ、本当はすっごくなりたくない

いねんけどな……。

魔王だし……怖いし……砲撃魔だし……トリガーハッピーだし……魔王だし。

「ま、まあ……臆せずに行こう！おー！」

俺は一人で意気込みながら歩いて行く。

あゝ、この身長で歩幅小さいから、あんまし歩きたくないなー。

~~~~~  
~~~~~

「ここ……何処？」

何か行き辺りばったりな感じで進んでたら、迷ってしまった。  
つかしいな、ここら辺じゃなかったっけ？まあ、知らんけど。

「さて、困ったな……」

「何が困ったなの？」

「ああ、聞いてくれよう。それがさ……って……誰だお前は……」

何か一人で喋ってたなら、誰かが入って来たよ。

やあね、独り言に入って来ちゃって……アニス君、そう言つの感  
心しないな。

へ？独り言して痛い子みたいに見られるよりましだろって？ですよ  
ね！。

「私？私は高町なのは！」

「……へっ？」

魔王様が降臨なさいました……。



## 第八話 アニス、魔王と出会う（後書き）

ちよっ W W W W 終わり方 W W W W W

まあ、続きは今日の夜にでも書きますよ

さて、気づいた方居ましたか？

アニスのツツコンでほしかった格好……

……その恰好のモデルは……

能美・クドリヤフカ！そう！彼女の格好なのです！

まあ、リトバス本編ではドロワーズとかアオザイだったりなんです

これは抱き枕の奴の格好なのです！

いやあ、やはりスパッツはジャスティス！あのムツチリ感……正直  
たまりません

そして、感想でアニスとアंकがバカップルに見えると頂いたので  
すが

……見返すと砂糖吐きそうなほど甘々なシーンが所々……

でもアニスのえへへ〜が書きたいので止めません！

だから、言っただろ？

アニスは受け何だって！！

第九話 アニス、魔王と仲良くなる（前書き）

はい、昼ごろにあげた続きです

とりまアニスは可愛い……

そう思う作者なわけです

本編始まります

## 第九話 アニス、魔王と仲良くなる

前回のあらすじ

俺、死ぬかもしれない……

~~~~~

「……こ、こんにちは」

一応、挨拶はしておこう。それが礼儀だ……魔王にとっての礼儀だ。

「こんにちは。どうしたの？何か困った事でもあった？」

……うむ、何だろうか、このお姉さん口調は……。

まさか、この私が君より年下に見えるかね？……あ、見えますか。ですよー。

「えっと……少し道に迷いまして」

「そうなの？じゃあ何処に行くのかな？お姉さんが連れてってあげるよ」

おう、案の定そうでした。この子、俺を同い年と見てませんねこれ。ああ、こう言ったデメリットや不祥事が起きるのか。なるほど把握

「えっと、翠屋って分かりますか？」

「……にやはは……それ、家の店だね」

「おお、マジか！っと……あの、お店まで案内してくれませんか？」

「にやはは、お安い御用だよ。それじゃあ行こうか」

そう言つて、俺の手を取り繋ぐのは……。

いや、恥ずかしいのでやめてください……俺は一応、手を握られるのを回避する。

「あ、嫌だった？」

「あの、俺一応九歳なので、子ども扱いは止めてください……」

おっと、オカリンの台詞を使ってしまった……。

「ええええええええええ！！！！」

今度は事前に耳を塞いでいたので、耳がキーンってなる事は無かった。

まあ、それよりも……。

「あの、お店案内してくれないんですか？」

「あ、ごめんごめん。それじゃあ行こうか」

なのははまだ引きつった顔をしてるけど、それでも何とか案内しようとして体を動かす。

こうなったのは俺のせいではあるまい……。

なのはサイド

こ、こんなに可愛い子が同じ年で男の子な筈がないの！
ありえないよ……絶対に！

「……どうしたの、高町さん？」

「あ、ううん！何でもない何でもない」

やっぱり、見れば見るほど、女の子にしか見えない……。

やっぱり嘘をついてる？でも、そんな嘘をついても特なんて何もないし、第一私達は会ったばかり。

じ、じゃあ本当に……。

「……高町さん？」

「は、はい！？」

「どうしたんです？本当に。さっきから顔が愉快的なオブジェに変わってますよ？」

「そ、それってどう言う事かな？」

「……いや、変な顔をしていたので……」

そう言っつて、無表情に戻る彼（？）
その顔は整っていて、髪も私より長く、良く手入れが行き届いているのが分かる。

そして、何より圧倒的なのは……その身長！私とかなりの差があるの。

……やっぱり、信じられない……。

「……あの、さっきからコロコロと顔が変わるのは、何かの癖なのでしょうか？」

「ふえっ!？」

「俺の顔をじろじろ見て、悩みだしたかと思えば、いきなり否定的な顔になり。でもやっぱり的な顔になったかと思えば、やっぱり否定的な顔に戻ったり」

うつ、全部読まれてるの……。

「まあ、大方。俺が男だと信じ切れてないだけだと思いますけど」

「……ごめんなさい……」

「謝らないでくださいよ、もう慣れてますから。こんなの許容の範囲です」

「で、でも……それでも……君を傷つけちゃった……かもしれないし……」

「……アニスです……」

「えっ……?」

「名前ですよ。そう言えば、高町さんは名乗ったのに、俺は名乗ってなかったじゃないですか。アニス・クロイツベルです。以後お見知りおきお」

そう言つて……彼はニコツと笑つた……。

ああ、もう男の子か女の子かなんてどうでも良いの……取り敢えず……この子は可愛い、それで良いの！

アニスサイド

何やらなのはから嫌な視線が送られて来たが、スルーの方向で。それにしても、こいつコロコロ顔変えてたな。全く、人の話は素直に信じてほしいわ。

まあ確かに、自業自得ではあるけども。それでも、ねえ？

「あ、ここが翠屋だよ」

「おお、ここが……」

喫茶翠屋……またの名を、魔王の巣窟。

ここに入ったパーティは最後……骨の髄までしゃぶり尽くされると言う恐怖の館……。

おう、考えただけで寒気が。怖い怖い。

「ありがとうございます」

「あ、ううん！全然良いよ！どうせ帰る途中だったんだし」

「そうですか……では、これで」

俺はなのはにそう言って、翠屋の中に入る。

「いらっしやいませ。喫茶翠屋へようこそ」

そこは……魔王の巣窟何かじゃなかった……。

フワリと甘い匂い漂う店内……だけど、ただ甘いだけじゃない……
コーヒーの苦みや紅茶の渋みの匂いも飛び込んでくる。

更には店内の雰囲気とマッチしており……それは凄く、美しく映っ

た……。

つつくしー……これぞ調和！ハーモニーだよ！！

「あ、あの。どうしたのかな？」

「はっ！すいません、つい呆けてしまいました」

ヤバイヤバイ……凄く遠い所に行ってしまった。
流石人気店。やはり伊達じゃない……よもやこの俺が魅了されるとは……侮りがたし、喫茶翠屋……。

「あら、小さいのに礼儀正しいのね。お母さんとかは来てないの？」

「あ、自分一人で来ました」

「お使いかしら？偉いわね」

そう言いながら、俺の頭を撫でてくる。
えっと……誰だっけこの人？確か高町……。

「桃子、どうしたんだ？」

そう！桃子さんだ！思い出した思い出した！

いやあ、頭ん中のモヤモヤが綺麗に晴れた！これでスッキリだわ！

「ああ、士郎さん。ちょっと、小さいお客さんと、ね」

桃子さんは士郎さんに向けてウィンクをする。

けっ！リア充爆発しろ！イチャイチャすんな！砂糖吐きそうなほど甘ったるいぜ。

「おや？本当だね。お母さんのお手伝いかい？」

「あ……その……」

つつい押し黙る。さっきは然程気にしなかったか……もう一回改めて言われると、キツイ物が……。

ああ、鬱だ、死のう……つつか首吊らせて死なせてくださいお願いします……。

「お母さん、買って来たよ。あ、アニス君、まだ選んでなかったんだ」

「あ、高町さん」

その時、厨房からなのはが出て来た。
どうやら裏口から入って着替えたのだろっ……ウエイトレス姿でした。

羨ましい……俺も着てm……いやいや！俺に女装っ気は無いんだ！

「お帰りなのは。知り合い？」

「にやはは、帰る途中に知り合つて。どうやらここに来る途中に迷子になっちゃつて。それで案内したの！」

「へえ、そうなのか。偉いなのは」

士郎さんは笑いながらなのはの頭を撫でる。
そして、なのはは恥ずかしそうに笑いながら、それを受け入れる。
ふと、士郎さんの撫でる手が止まる。

「ん？アニス、君？」

あ、そこ気にしちゃう系ですか。
まあ、そうですね。貴方の娘さんもそうでしたし。

「君、男の子なのかい？」

「あ、はい。それと、高町さ……なのはさんと同じ年です」

ここには今高町の性が三人いるので、ごっちゃにならないように下の名前を呼んだ。

士郎さんは驚きで目が見開かれていたが、桃子さんはあらあらみたいな顔で士郎さんを見ていた。

何故驚かないし、桃子さん……。

〈割愛〉

「あの、ケーキ買いたいのですが。良いですか？」

「ええ、どうぞ。好きなものを選んでくださいね」

……うむ、良い笑顔だ。これが俗に言う、接客笑顔なのだろう。

まあ、桃子さんのは本当に笑ってるだけなんだろうけど。

さて、ケーキを買うにしても、何を買おうか……。

アंकはアイスしか食べないから、ケーキを買っても食わないかもしれない。

はやては食べるな、間違いなく。翠屋の名前くらいならはやても知ってるはずだ。

当然、その旨さも。

……ここはやはり、当店人気のシュークリームが無難だろうね。後はショートケーキにやチョコケーキ。ショコラも置いてある。可愛いな。

こう言った甘い物、ケーキとか作ってアंकに上げたら喜ぶかな？それとも、食べてくれないのかな？アイスしか食べないアंकでも、俺の作った物なら！

「……えへへ……」

自然と顔が綻ぶ。

そうだ、今度日頃の感謝も込めて、ケーキを作ろう。

幾ら不格好でも良い……必要なのは相手を思いやる気持ちだって、誰かが言ってたな。

「あ、あの……アニス君」

「？どうしたんです？高町さん」

「あ……あの……その……わ、私と友達になってください！」

……いきなり何言っただ、この砲撃魔は……。

んだア、その思わせぶりな表情は……あ、思わせぶりじゃない、本
気。

あややや、こんな俺と友達になりたいとか、凄く変わった子ですね
この子。

「あ、はあ。良いですけど……」

「本当に！？ありがとうございます！」

「……何でそこまで喜ばれるのかわかりませんが、よろしくお願
いします」

「あ、こちらこそ……。そ、それとね」

「まだ何かあるんですか？」

「その、敬語……使わなくて良いよ？同い年何だし、それに、下の
名前で呼んでほしいの！」

「……うん、分かった。よろしく、なのはちゃん」

ははは、キミの頼みは断れないです。

元ネタ知らん人は、某動画サイトでうる覚えでエルシャダイって検索してみる。

まあ、エルシャダイはもう古いが。俺は好きだ！

「………わ〜……………」

……何かなのはが呆けちゃったけど、気にしない方向で行きます。さて、何を買おうかな〜。

~~~~~

「ありがとございました〜」

はい、買い終わりました。それにしても、すっかり話し込んだじゃったな〜

あの後、ケーキを選んだのは良いけど、なのはがちょうど休憩に入ってたんだ。

それで、なのはが俺を誘って、一緒にケーキ食べながらお話ししよう？って言われたんだ。

……背筋が凍るように冷たくなったのは……気のせいだと思いたい。

しかも話が弾み、桃子さんと土郎さんからお昼をごちそうになり。お昼を食べたらまたなのはと喋り、美由紀さんとブラコンが帰って来て、美由紀さんに愛でられ。

ブラコンは俺が男だと分かるといきなり襲いかかってきたが、土郎さんが取り押さえお説教。

俺は最後に、獣と言って止めを刺した。

それでもう夕方です。いやあ、すっかり話し込んじゃったよ！  
アंक、怒ってないの良いな……。……。

そんな事を思いながら、俺は何とか迷わないではやての家に着きました。

……玄関から異様な殺気を感じるのは……嘘だと思いたい……。

「た……ただいま……」

「随分遅かったな、アニス……」

「ひいっ！ー！」

そこには腕を組み、仁王立ちで待ち構えていたアंकの姿が!!

「ア、アंक……」

「今までそこほつつき歩いてたんだ？怒らないから俺に話してみろ？なっ？」

ああ、顔は笑ってるのに、どうして目だけ笑ってないのでしょうか？  
答えは単純明快！怒ってるからです！！  
何それワロエナイ……。

「ア、アंक……」

「何だ？」

「……もし素直に話たとして、許してくれる？」

「……内容次第だ」

良い笑顔で突っぱねられました。

でもやっぱり目が笑っていませんでした……。そして、素直に話したら拳骨一発と、俺がどれだけ心配したか分かってんのか、と、くどくどお説教されました。はやても同様です。取り敢えず……。ごめんなさい……。あ、ちなみにだけど。まだ原作は始まってなかったお。ユーノもレイハさんも居なかったし無かったお。

オ・マ・ケ

「アंकアंक！」

「何だ？」

「ケーキ買って来たんだ。はやてちゃんの分もあるから、一緒に食べよ？」

「わあ、ケーキ買って来たん！？やったでえ！」

「ふん、俺は甘い物はあんまり好きじゃないんだ」

「何だよ。せっかくこの町一番人気の喫茶店、翠屋のケーキとシュークリーム買って来たのに」

「マジかいな！？あの人気の！？はあ、一度でええから食べてみたかったんや、そのケーキ」

「喜んでくれて嬉しいよ。アंकも食べようよ？」

「だから、俺は！」

「じゃあ、さ……俺がアंकの為にケーキを作ったら……さ。その、食べてくれる？」

「…………ふん…………」

「…………アंक？」

「…………まあ、食べてやらん事もない」

「…………ツンデレ乙」

おおぅ、はやても同じ事思って口に出したのか……。  
アニスたんびつくり……。

## 第九話 アニス、魔王と仲良くなる（後書き）

現在のフラグパロメーター

アंक：ツンとデレの狭間辺り

はやて：ただ今理性と格闘中

なのは：まだまだだね、後百ゲームは行けるよ？

全くわけわからめ

アंकはツンとデレの狭間と言っても、城壁が五重位なので一筋縄じゃいかないです

その点、なのはとはやてはアंकほどでは無い

でもまだ落ちちゃいないよ

だって、まだ会って数日そこら

流石に落ちないよ

では、今日はここまで

次回は儀式の話を書きたいな

読んでくださりありがとうございます



## 第十話 儀式と契約（前書き）

今日は一段と寒かったです

まさかジャンパーを家に忘れて、ジャンパー無しで部活に出るハメになるとは

まあ、自業自得か

忘れた俺が悪い

本編始まります

## 第十話 儀式と契約

結構な日が過ぎた。

俺ははやてとどんどん仲良くなり、休日には翠屋に行き、なのはと話す。

そんな事をしてる内に、なのはとも仲良くなった。

そして、ふと思ったんだ……。

「儀式って、いつやんの？」

っと……。

~~~~~  
~~~~~

少し俺は、だらけ過ぎた様だ。

本来の目的を、少しばかり忘れていた……。

「と、言うわけでアंक。儀式っていつやんの？」

「……はあ？」

アंकに聞いてみた所、何言っただこいつみたいな目で見られた。いや、聞いてないんかい、神様に……俺もいつやるは聞いてないけどね。

「儀式？」

「あれ、やっぱり聞いてないの？」

「ああ、初耳だな」

「ありやりや……」

神様エ……ちゃんと説明しようよ……。

俺は神様から聞いた事を全てアंकに話した。全く、神様もちゃんと話しておいてくれよ。

「……大体分かった」

「そう、良かった……それで、儀式っていつやんのかな？」

「それは俺に聞かれても分かん。あいつに直接聞くしかないだろう」

「そつだよね」

どうやって神様と話そうか……そう考えていた時、俺の首に掛けていたデバイス。クイーンがいきなり光りだす。  
俺はびっくりして、少し短い悲鳴を上げてしまった。

「な、何でクイーンが光り出したの!？」

「さあな」

……ま、まさか……ね。

神様が通信してきた……何て事は無いよね？

《あー、あー……テストス……おお、元気か！アニスにアंकよ!》

「……予想通りだコノヤロー」

今この場にはやてが居なかった事を感謝するがいいおっさん。  
はやてが居たら魔法バレする所だった……まあ、しても良いんだけどね。

これから起こる事を事前に伝えおけば、心構えがまた違ってくるしね。

「ああ、俺は元気だ」

「俺も元気だよ！」

《そうかそうか。それより、儀式の事で何か話があると聞こえたのじゃが》

おっさん、神様の癖に地獄耳かよ………すげえなこのおっさん。  
どんだけハイスペックよ………ああ、神様だからか………。

「うん。それがさ、一体儀式って何をすれば良いの？それと、儀式っていつやるの？」

《まあ、大方そんな所じゃろうと思ったわい》

「知ってるんだったら早く話してくれても良いだろう！」

《ははは、すまんすまん。それじゃあ、簡単に儀式の内容と、いつやるのかを決めよう》

そんな簡単に言っただけなのか……？  
それに、いつやるのかも決めれるのかよ……。

《先ず、何をするかじゃが。簡単じゃ、悪魔を倒せば良い》

「悪魔を？」

《そうじゃ。悪魔をじゃ》

「まあ、悪魔の加護って言うし、やっぱり悪魔を倒したりすんのか  
なとは思ってたけど」

《それを、数回やるのじゃ》

「数回ねえ。分かったよ、基本的に悪魔を倒せば良い。それも数回  
……ルールは？」

《倒しさえすればそれで良い。もちろん、アंकと協力するもよし、

斬魄刀をフルに使うもよしじゃ」

「分かった！それで、いつやるの？」

それが一番知りたい事だ。

自分自身、もう儀式何てやらなんじゃね？とか思ってたし……。

《そうじゃな。お主はいつやりたい？》

「いや、俺に聞かれても。て言うか決めれるの！？」

《基本、悪魔は融通聞くぞ？》

ええ！？あちら側結構アバウト！しかもあっちが協力してくれるのかよ！？

うわぁ……何か、悪魔さんごめんなさい……。

「それって、倒しちや可愛そうなんじゃ……。悪魔さん達が率先してやってくれるんでしょ？」

《いやまあ、悪魔のご加護を人間に与えちゃったこちら側の不手際なので気にしないと申してたしのう……》

「……悪魔さん……ごめんなさい……」

貴方達は良い人だ！いや、良い悪魔だ！このおっさんより優しい！俺なんかの為に儀式してくれるなんて……。

「そ、それじゃあ……明日の夜、はやてが寝静まったところにもお願いしようかな？」

《うむ、分かった。言っておくぞ。それと、死にたがりを抑えてる様じゃが、少し晴らしておかないと、いつか重くのしかかって来るぞ？それでは！》

そう言つて、神様の声は聞こえなくなり、クイーンから発せられる光は消えた。

さて……どうしようかな。

「アंकアंक」。悪魔さんに菓子折り持ってた方が良いかな？」

「俺に聞くな。て言うか、悪魔に菓子折り持って行く奴なんて初めて見るわ」



「いや、だってあっちの不幸際とか言われても……実感湧かないんだもん……それに、さ。この死にたがりを治す為に儀式するのに……もしかしたら……消えないかもしれないって言われちゃったんだ」

そう、それは一番最初。神様に初めて会った時に言われた言葉。別に、これが治らなくても、今の俺はちゃんと抑えられている……でも、いつかはそれが出ちゃう事があるだろう……。今は、アंकもそうだけど、はやてが居る……。なのはも居る。だから、これを克服したい……。

「あの……アंक……俺に力を貸してくれないかな？あ、嫌だったら良いんだよ？強要はしないよ、これは俺個人の問題なんだしさ……うん……アंकは関係……ない事だし……」

「……はあ……」

ギョッ……。

「ふわあ……」

不意に、俺はアंकに抱きしめられる……。  
い、いきなり何だよ、変な声出ちゃったじゃん！

「そんな今にも泣き出しそうな顔で言われても、説得力ねえんだよ。  
バーカ」

「ふわあ！やつ！ちよつ！耳元で喋んな！」

「……やらせろよ、俺にも……」

「ふえ………？」

「手伝ってやる。それで文句無いだろ？」

「……アंकうゝ……ありがとゝ……」

やっぱりアंकは優しいな！  
良かった、嫌だって言われたら泣いちゃう所だったよ……ふう、助かった。

「あ、でも……あまり悪魔さんを痛めつけないでね？」

「はいはい、分かった分かった」

「うん！オッケー！」

よし！これで大丈夫だ！

あ、でも……悪魔さんの方が強いって事もあるかも……まあ、斬魄刀を使って頑張ろう！  
その時、この部屋のドアが開かれる。

「アニス君、アंकさん、ご飯やで〜って……失礼しました……」

ボタン……。

何故かはやては顔を真っ赤にしながらこの部屋を出て行った……。そして、それを見た瞬間アंकは俺から離れると、すぐさまはやてを追いかけに行った……。

あれ？俺なんかした？……まあ、分からないや。

「もう、アंक……」

やんちゃになっちゃって……アニスたん嬉しい！  
あのアंकが、ここまで感情豊かになるなんて……素晴らしい！！

「はぁ……アंकウ……」

……ああ、やっぱり……もの凄く依存しちゃってるんだな俺……。  
……いやいや！危ない方向じゃないよ！？俺とアंकは同じ男！い  
くら俺が女の子みたいな顔でも、アंकは嫌でしょうに！お、俺は  
……まあ……来るものは拒まず？いや、でも……アंक限定かも……  
……でも！俺はゲイじゃないし……普通に女の子が好きだし……。

「……結論、どっちでも良いや」

もう、この際どうでも良くなっちゃった。  
だから、ご飯食べに行こーっと。

~~~~~

そしてあっちゅう間に次の日、はやてが寝静まった頃。

「さて、アंक行こうか」

「そうだな……所で……」

「ん？どうしたの？」

「……何処でその儀式はやるんだ？」

……時が止まった……。

ああ、場所、決めてなかったっけ……どうしよう……。そう思った時、昨日みたいにまたクイーンが光だし、いきなり喋りだした。

《場所について知りたいのじゃな？》

「あんた見てるだろ。絶対上から見てるだろ……」

《何の事じゃ？》

うわ、こいつ嘘下手だ……。

八橋やるからもう少し嘘磨いてこいコノヤロー。つうか、もしかしてこのおっさんに入浴シーンを見られてたり……。

《それで、場所じゃったな。この家の外に出れば、すぐにでも始め

られるぞい？》

「マジかよ……でも、音とかヤバくない？もし結界を貼るんだとしても、管理局にばれちゃうよ？」

《そこは抜かりない。ちゃんと魔力を感知されない様に貼ってある。それに、斬魄刀や他の魔法を使ってもばれないようになってるぞい》

「おお、流石神様だな。至れり尽くせり乙」

《それじゃあ、健闘を祈る。ではの》

そして、クイーンの発光は止んだ……さて、それじゃ行きますか！
俺とアंकは靴を履き、玄関のドアを開けた……。

「……ほう」

先ず言葉を漏らしたのはアंक。
短い言葉ながらも、普段アंकが上げない声なので……十分アंकが驚いてるのが分かる。

「……あ、あれは……」

少し周りを見渡すと、少し遠めの所に、人影が見える。
たぶん、あれが悪魔さんなのだろう……。

俺はバリアジャケットを展開して、アंकは翼を展開して空を飛ぶ。

少し移動してから、悪魔さんも気づいたのだろう、俺達の所まで飛んで近づいてきた。

ああ……何でそんなに優しいんですか？

「こんにちは」

「あ、こんにちは……」

「……ふん」

「今回はこちらの不手際で、悪魔の加護を授けてしまい申し訳ありませんでした。貴方様の事情は良く把握しています、差支えが無ければ、このまますぐにでも第一回の儀式を執り行いたいと思います」

うわあ……めっちゃやり難い……凄く低姿勢何だけどこの悪魔さん……。

今、俺の中の悪魔のイメージが崩れ去り、目の前の悪魔さんのイメ

ージが築き上げられた。

「あ、あの……もし悪魔さん達が、僕に倒されちゃったら……消えちゃうの？」

「いえ、確かに消えますが。それは地獄に戻るのと同義なので、大丈夫ですよ。貴方は優しい方なのですね……」

「あ、ありがとうございます……」

えへへ、褒められちゃった……。

「それでは、始めましょう。私の名はザゼルと申します」

「あ、アニス・クロイツベルです。それで、こっちはアंकって言います！」

「分かりました。それでは、儀式を始めましょうかアニス君」

おお！一発で俺が男だつて分かった！
すげえ、悪魔さんすげえ！

「手加減は一切不要です。2対1でもよし、いきなり全力で掛かってくるもよし。さあ、掛かって来なさい！」

「分かりました！行きます！」

俺は先ず、デバイスの剣でザゼルさんと対峙する。
ザゼルさんは武器も何も持たず、自らの肉体で俺の剣を防いだ。そして、そのまま流れるように蹴りを加えられ、吹き飛ばされる。

「くっ！」

「まだまだですよ！」

「っ！？速い！」

「はあ！！！」

ドカツ！！

「かふっ！……ちいっ！」

ブン！

追撃を加えられたけど、そのまま反撃に転じ、フック寄りのパンチを繰り出すが、簡単に避けられてしまう。

「ハアッ！」

ドンドンドン！

アंकが後ろで火炎弾を出して援護してくれる。けど、ザゼルさんはそれを全て素手で払い落とす。

「そんな物！」

お返しとばかりに、ザゼルさんは大きな火の弾を作りだし、アंकに飛ばす。

アंकは旋回してそれを避けるが、ザゼルさんがその隙に一瞬で回り込み、アंकを殴り飛ばす。

「くっ……アニス！こいつ強いぞ！斬魄刀を使え！」

「分かってるよ！……こい！」

俺は一振りの斬魄刀を取り出す、そして、始解のキーワードを唱える。

「射殺せ、神槍！」

ビュン！

もの凄い速度で斬魄刀の刀身が、ザゼルさん目掛けて伸びる。だけど、それをザゼルさんは紙一重で避け、こっちに突っ込んでくる。

「やっぱ！」

「まだまだですね！」

「ちいっ！ラシルド！……」

障壁じゃ間に合わないの、ここはラシルドを使うことにする。

でも……強度が心配だなこれ……。

ドン！

「くっ！少し、固いですね……でも！」

ピシ、ピシピシ……バカン……！

「碎けないほどじゃない……！」

くっ！やっぱり突破された……何てね。

「月牙……」

「なっ！？」

俺はラシルドを視覚にし、瞬時に神槍から斬月に変え、魔力を込めて月牙の構えを取っていた。いつけえ！

「天衝！」

シュン!!

黒い月牙がザゼルさんに向かって行く。

ザゼルさんは防御の構えを取るが、月牙の勢いがあり過ぎて、吹っ飛んでしまう。

ドン!

「ぐっ……はっ……」

「バインド!!」

ガチン!!

これ以上俺は戦いたくなかったので、ザゼルさんをバインドで動けないようにする。

ああ、体が痛い……でも、初めてだな、お父さんやアंक以外の人と戦うの。人じゃ無いけど……。

「はい、降参してくれるよね?」

俺は斬月の切っ先を向けて、魔力を込めながら言う。
ザゼルさんは観念した顔になり、苦笑する。

「ええ、私の負けで良いです。いやあ、お強い！こんなに強い人と戦うのは久しぶりでした！ああ、出来るならもう少し戦いたかったですけど……それでは、これで第一回の儀式が終了しました」

ふう、これで第一儀式終了か……でも、ザゼルさん顔に似合わず戦闘狂なんですネ……。
シグナムとやらしたらいつまでも戦ってそう……。

「それでは、最後に契約に移りたいと思います」

「へ？契約？」

「あれ？聞いてないんですか？アニス君が私に勝つたら、貴方の使い魔になって一生を守護するよう命じられたのですが？」

「……ええええ！？」

「何だと！？」

あ、アंकも流石に驚くよね。
て言うか俺聞いてないよ！あの馬鹿神様！また重要な事だけ言い忘れてやがったな！

「ち、ちなみに……俺が負けた場合って……どうなってたんですか？」

「アニス君が負けたら、私が貴方を食べてました、性的な意味で」

「……ふえ！？」

「おい！アニスに何言ってるんだ！」

た、たたたた……食べられるって……しかも性的な意味で！？
うわわわわ！か、勝って良かった……。

「あれ？もしかしてザゼルさんって……女性？」

「ええ、性別的にはそれであってます。でも、私はまだ女性と言われるような年齢ではありません。まあ、人間の年齢で言うなら、裕に100歳は超えてますけど」

「そ、そうなんですか……」

さ、流石悪魔さん……規格外すぎるぜ……。

「それでは、契約に移りたいと思います」

「あ、はい……」

「それでは、頂きます」

「へっ？」

ザゼルさんはそう言うと、俺の所に近づいてきて、首筋に口を添える。

最初は軽い甘噛みから入ってきた。

「ふぁっ！」

「ぶーっ！っ！っ！」

そして次に、そのまま一気に首筋を咬み。

チュー、チュー……ゴクン。

俺の血を吸って行つた。

しかも、痛み何て一切感じない……あるのはただ、快樂のみ、だから俺は。

「ひやああああ!!」

終始喘いでました。

ああ、顔から火が出るほど恥ずかしい……死にたいな……。

「……つく……はあ、ご馳走様でした。これで契約は終了しました。それでは、私を呼びたい時は、使い魔召喚と唱え、最後に私の名前を呼んでください、そうしたら私が出てきますので。では」

「あ、おいまて!!」

アंकがザゼルさんに掴みかかろうとしたが、時すでに遅し。ザゼルさんは既に何処かに消えてしまった……。

「おい、アニス！大丈夫か！」

「ハア……ハア……アン……ク……」

「どうした！？何処か痛むのか！？」

「ハア……ハア……違うの……か……体が……ハア……ハア……熱
くって……ドキドキが止まらないのぉ……きゅう……」

そして、俺は意識を失った……。

次の日、あの後俺はどうしたのかアंकに聞いたら。

そのまま目を回して気を失ったらしい。たぶん、ザゼルさんが吸血した時に、痛みが生じないように、最初の甘噛みで媚薬効果のある何かを注入してたらしい。

それも、次の日に、ザゼルさんと呼んで聞きました。

いやぁ……俺、もう一生媚薬何て体に混入されたくない……そう思った俺なのでした……。

第十話 儀式と契約（後書き）

ザゼルの予想C Vは三瓶由布子さんです

ハガレンのプライドの声の人です

あの人の声は凄く好きなので、その感じに合うように書いてしま
いました

そして、やはりそこは受けなアニスたん

まさか人生初の媚薬を盛られるとは……

でも、私は媚薬はもう出さないかも……たぶん……

久々の戦闘が書けたので、取り敢えずは満足

まだ斬魄刀はいっぱいあるな

さて、無印の話どうしようかな。やっぱ傍観かな

……うん、傍観で良いや

今度はアニスとはやての絡みを書ければなと思ってます

ここまで読んでくださりありがとうございます

第十一話 正直に話そう（前書き）

今日もさみー

だから布団に入っていたい今日この頃

あれだね、寒いと炬燵が欲しくなってくるね

ちょっと倉庫から引っ張り出してこようかな

さて、本編始まります

第十一話 正直に話そう

はやてサイド

も、もう我慢できひん……。

アニス君が悪いんや、アニス君が可愛いのが悪いんや！

「アニス君！」

「ん？どうしたの？はやても、キャッ！？」

「アニス君かわええよ」

何やろう……アニス君を見てるところ……抱きしめたくなるんはどないしてなんかな？

母性本能がくすぐられると言つか、何と言つか。

「は、はやてちゃん……恥ずかしいよ」

「いつもアंकさんに抱きしめられとるのに何言つとんねん！」

「あーうー、幾らアंकが居ないからって、些か大胆過ぎだよはやてちゃん……あうあう……」

そう、今アंकさんは絶賛就職活動中。

アニス君は年齢的に働けないので、必然的にアंकさんが仕事を探して働くと言う事になっている。

就職と言っても、アルバイトやねんけどな。
うちは別に気にしてへんのに。

「アニス君のその恰好、他の人に見せたらアカンよ？」

「寝間着は人に見せる物じゃないよ、はやてちゃん離れてよ。
苦しい」

「ホンマ、こつ近くで見ると……どう見ても女の子にしか見えへんな……胸揉んでみるか」

「ひゃっ！は、はやてちゃん！？だ、だめ！くっ、あはははは！くくすぐつたいよ！あはははは！」

「ああ……幸せや……」

「こ、こんなことで幸せを感じないでよ！？ああ、ワイシャツがシ

ワくちゃに……もう、はやてちゃんが僕を膝に乗っけたいなんて言い出すから……」

「あはは、すまんなあ。アニス君が可愛すぎるから、どうしても歯止めが効かんくなってまうねん」

「ぶーぶー。結構恥ずかしんだよ？」

「……もうかわええなあ！」

顔を赤らめて上目づかいで言われても説得力の欠片もあらへん！
もうアニス君は妹！ウチの妹に決まりや！性別？アニス君の前では塵にも等しいで！

「アニス君、ウチホンマ幸せや」

「……はやてちゃん」

「両親が亡くなってもうて……足が不自由になってもうて……ウチ、寂しかった……学校にも行けへんし、病院から帰って来ても、誰もお帰り何て言ってくれる人……おらんかったし……ご飯を作っても、美味しいって言って、笑ってくれる人がおらんかった……」

「……………」

「ホンマ、アニス君とアंकさんには感謝やで……不謹慎やけど……
アニス君がここに逃げてきてくれて、ホンマ良かった……」

「……はやてちゃん……」

「何や……?」

「……魔法つて、信じる?」

アニスサイド

今までの事を思い出して泣いているはやてを見ているのが俺には出来なかった。

寂しいとはやての口から出るのを見ていらなかった。

そして、今がとても幸せだと言って笑うはやてを見ていらなかった。

これから始まる悲劇を、これから動き出す運命を……。何も知らずに、今が幸せだと言って、俺に笑いかけてくれるはやての笑顔を見て……俺は俺を許せなくなった。

たぶん、俺が手を出さなくても……なのは達が終わらせる。
むしろ、俺が手を出さなければ、物語は改変されなくて済む……だ
けど……俺ははやてに嘘をつきたくなかったし、はやての笑顔を、
守りたくなっただ……。

「ま、ほう……?」

「そう、魔法」

「あはは、アニス君、夢見すぎやで。このご時世に魔法で……そん
なんある訳ないやん」

「それが、あるとしたらどうする?」

「……せやな、取り敢えず、見せてもらいたいわ」

「……だったら、見せてあげるよ」

「へっ……?」

俺ははやての膝から立ち上がり、はやての目の前に立つ。
そして、極限まで魔力を抑え、クイーンを起動させる。

「クイーン、セットアップ」

《了解しました》

バリアジャケットを纏い、ブリジットと同じ格好になる。
はやては目を丸くして、俺を見ている。

「まあ、魔法と言っても……少し科学的だけだね」

「……か　かわええなあ！何やねんその修道女みたいな恰好は！
？似合いますぎや！」

「い、いや、はやてちゃん……結構真面目な話なんだけど……」

「はっ！カメラ！カメラどこや！？アニス君のこんな可愛い格好、
いつ見れるか分からへん！……いや、いつも見とるか」

「……お……お願いだから、俺の話を真面目に聞いてほしいんだけ

「ふう……それで、魔法の話やったな」

け、賢者タイム……だと……。

はやて、あの間奏の間に何してきたんだ……。

取り敢えず俺はバリアジャケットを解除して、話を続ける。

「はやて……実は俺、この世界とは違うから来たんだ……」

「違う世界？」

「うん……そこは……そうだね、魔法の世界って言っても間違いないかもね。俺はその世界から来たんだ」

「……ちよつと待ってえな……せやったら、逃げてる云々は嘘やっ
たんか？」

「ううん……それはホント……俺は逃げて来たんだ、あの世界から。
俺の一族、クロイツベル一族の手から……」

「クロイツベル……一族……？」

「そう、俺の一族。……俺は、産まれちゃいけない存在だったんだ。その昔、俺の一族の一人が……それはもう、化け物の様に強かったんだ……だから、その人は皆に恐れられて、殺された。その生まれ変わりが、俺」

「……………」

「だから、俺は……その一族から命を狙われる事になったんだ……その時、お父さんとお母さんが戦ったんだけど……連れて行かれちゃって……俺はアंकと逃げたんだ……この世界に……」

自分が力を使いすぎたせいで、あんな事が起きた。
俺が引き起こした悲劇……いや、自業自得なのかもしれない……。

「……いきなり、魔法だとか、世界だとか言われても困っちゃうよね……ごめん、はやてちゃん」

「……アニス君……」

「……何？」

「アニス君は、ズルいで……」

「……………えっ？」

「そんな事、隠しとつたんか……。しかも、命狙われてない言つてたのに、そっちが嘘やつたんか……………」

「は、はやてちゃん？」

「そこに座りい！！」

「は、はい！！！」

いきなりはやてが大きな声を出したので、俺はびっくりしてはやての言つ事を聞いてしまう。

「ええか！ウチらは家族や！！隠し事はするなとは言わへん！！せやけどなあ、産まれたらアカンだとか、困っちゃうよねとか！！そないな事言わんとして！！少なくとも、アニス君が産まれてへんかったら、ウチは今も一人のままや！せやから……………そないな事……………言わんとして……………」

そう言つて、はやては泣き崩れてしまった……………。

「は、はやてちゃん!？」

「うう……アニス君……グスッ……居なくなったり……せえへんよな？」

「……うん、俺は絶対に居なくなるらないよ……」

「アニス君……」

「はやてちゃん……ありがとう」

「ふえっ？」

「はやてちゃんのお蔭で、少し気が楽になったよ」

「……ふふ、そうか?……なあ、アニス君」

「何?」

「……抱きしめてくれへんかな？」

「……はう……お、俺から？」

「乙女を泣かせた罰や、さあ、覚悟決めえ」

くっ……それを言われると……かなり痛い……。
……仕方ない……俺ははやてを車いすから抱き上げて、抱きしめる。

「ア、アニス君……大胆過ぎや……」

「う……うるさい……」

もう駄目……恥ずかしい……。

あうあうあうあうあうあうあうあうあう……。……。

「……すー……」

「うえっ！？ちよっ、はやてちゃん！？」

ね、寝ちゃってる……。

でも、はやての寝顔可愛いな……俺ははやてを床に置き、すぐさま部屋から毛布を持ってきて、はやてに掛ける。

「泣き疲れちゃったのかな？」

悪い事しちゃったな……。

アंकにも言わないと、はやてに魔法バラしちゃったって。怒るかな？

……はう、それはそれでしょげるわ……。

あ……はやての寝顔見てたら……俺も眠くなってきた……。
俺ははやての横で眠ってしまった。

~~~~~

「ただいま」

はあ、何とかバイト先を手に入れた。

まあ、何とも魔力が高いガキが一人居たが、関係者ではないので害はないだろう……。

それにしても、静かすぎる……。

いつもならアニス辺りが走って来て抱き着いてくる筈だが……。

俺は靴を脱ぎ、居間に向かう。

「……ああ、静かな理由が分かった」

八神が寝ている傍らで、アニスははやての手を握って眠っている。  
傍から見たら姉妹に見えるな……っと、アニスは男だったな……日に日に女っぽくなってくるから複雑だ……。

「……取り敢えず、グリード、撮っとけ」

《あいよ》

何となく写真にとっておこう。

……た、他意はねえよ！ただたまにデバイス使ってやらないとあれだと思っただけだ！！

## 第十一話 正直に話そう（後書き）

キンクリと急展開にワロタｗｗｗｗ

どうしてこうなったｗｗｗｗ

さて、ここでフラグパロメーターを見ましょう

アंक：負けるものかああああ！！

はやて：アニス君……お持ち帰りしてもええか？

なのは：まだだ！まだ落ちんよ！

はやてええええええええ！！お前が一番目に落ちたのかああああ！！

まあ、俺の意図です、さーせんｗｗｗｗ

後ね

ナツブラがあと三回で終わるんだって……

……緑川さああああん！嘘だと言ってええええええええええ！！

いやああああああああああああああ！！

はあ、はあ、すいません、取り乱しました

さて、また明日も頑張りますか

そろそろ死にたがりが顔を出すぜい

ここまで読んでくださりありがとうございます

## 第十二話 アニスの異常性（前書き）

今日はもうあれだね

修学旅行の話で盛り上がったね

来月の始め辺りに修学旅行行ってくるんで、その話合いました

みんな、自分勝手すぎやろ……

本編は始まります

## 第十二話 アニスの異常性

アニスサイド

「ハア……ハア……」

洒落になってねえよ……これ……。  
ヤバい……体が言う事を効かない……。

ガン！ガン！ガン！

「ハア……ハア……」

さっきから俺は、意識を保つため壁に頭を打ち付けている。  
もう、何度ぶつけたか分からない……頭の皮膚は切れ、血が噴き出  
ている。

にも関わらず、俺は一向に止めることをしらない。

「ハア……ハア……」

まさか、こんな朝早くから出るとは思わなかったぞ……。

ガン！ガン！ガン！

「ハア……ハア……」

頼むから……収まってくれ……これ以上……は、俺も……意識を……  
……。  
持つて行かれる……流される……。

その時、この部屋のドアが開かれる……。

「アニス、朝だ……ぞ……。おい！！お前何やってんだ！？」

「ハア……ハア……ははは……やっと……来てくれた……」

アंकがこの部屋にやって来たのに、俺は一向に頭を打ち付けるのを止めない。

そろそろ、本気でヤバイよ……。

「血が出てるぞ！もう止めろ！」



「ハア……ハア……簡単に言っなよ……結構、正気を保つので精一杯……何だよ……」

「……まさか……」

「ハア……ハア……そう……その……まさかだよ……もう、頭の中で、ガンガンうるさいんだ……」

殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して、死にたい死にたい死にたい死にたい……。

「アン……ク……もう、無理……だから、俺を縛り上げて……。後、口も何か加えさせて縛って……何するか分からないし……下を咬んで死ぬかもしれない……」

「そ、そこまで……」

「早く！……もう……無理……手遅れに……なる前に……」

「ちいっ！はやまんじゃねえぞ……！」

「ははは……死なない……よ……」

そこで、俺は意識を失った……。

アंकサイド

くそ！何もこんな朝早くに出なくても良いだろうが！  
俺は急いでアニスの部屋から出ていき、リビングに向かう。

「八神！」

「は、はい！？」

「何か縛るものとタオル無いか！？」

「あ、それやったらキッチンの戸棚の中に、ビニール紐と、洗面所にタオル干してありますよ」

「分かった！」

急いで持って行かないと、あいつが何を仕出かすか分かったもんじゃない！

部屋に戻ってきて、辺り一面血の海とかだったら絶対に嫌だぞ！！

「アंकさん、そないに急いでどうしたん？」

「今は構ってる時間はねえ！！」

俺は八神を無視して、そのままアニスの部屋に走る。

「アニス！！」

「……………ア……………ン……………ク……………」

部屋に戻ってみると、そこには目に光が無く、うつろになっているアニスが居た。

俺が部屋に入ってきたのに気づき、俺の所に視線を向ける。

「……………死……………に……………たい……………」

「ふざけんな！何が死にたいだ！まだ両親見つけてないだろう！」

「……もう……無理……」

震える声でアニスは良い、目をきよろきよろさせる。  
そして、俺が持つてる紐に目が留まる。

「……アネク……その紐……ちょーだい……？」

「何……言っただよ……お前……」

「紐……ちょーだい……首……吊って死ぬから……」

「正氣に戻れ！！自分が何言っただのか分かってんのか！？」

「……死にたい……死にたい……死にたい死にたい死にたい  
死にたい死にたい死にたい……！」

「ちいっ！！」

俺はアニスの押さえつけ、手首と足首を縛り上げ。  
口に猿轡の様にし、タオルで縛る。

「むーっ！むーっ！」

「……何か、酷い絵図らに……」

アニスは頭から出血し、手足は縛られ口も塞がれている。

「むーっ！！むーっ！！」

「しばらくそのままで、頭冷やしやがれ」

そう言って、俺はアニスの部屋のドアを閉める。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「……むうっ……」

「……何だ？」

「アニス君、起きてけえへんなあ」

「……今日は、まだ寝かしといてやれ」

「……アंकさん、何か隠してへん？」

「……何でそう思う」

「アニス君は、隠し事……魔法の事や、自分の事を話してくれた。でも、アंकさんからはまだ何にも聞いてない」

「……あいつ、バラしたのか……。
つたく、お人好しも、ここまでくれば呆れて来るな。」

「……まあ、そこまであいつが話したんなら、そこまでお前を信頼してる証拠か……」

「ふえっ!？」

まあ、こいつが原作キャラ……だったか？
その立ち位置に居るから話した可能性も高いけどな……。

「……八神、この話を聞いて、あいつを軽蔑したり、怖がったりし

ないか？」

「……いきなり何を言い出すんですか？ウチがアニス君を軽蔑するなんて……そないな事考えられへん」

「……そうか……だったら教えてやる……」

俺は、アニスの死にたがりについて、簡単に八神に説明した。
昔は酷かったが、今は自分の意志で抑えている。だが、箍が外れるとすぐに自我を保てなくなり、目につく物全てで自分を傷つけ、自分を死に晒すような事を繰り返す。と。

「……それじゃ、アニス君は今……」

「ああ、今日がちょうどその日にぶち当たっちゃった。だけど、今さっき紐で縛り上げて来たから大丈夫だろ」

「ひ、紐とタオル持ってたんはその為か！？……マニアックやな
……」

「違う！勘違いすんな！！何がマニアックやだ！！」

「でも、九歳の子を縛り上げるなんて……少しやり過ぎとちやいますか？」

「いや、そうでもしないと、本当に首を吊りかねなかったし、何かで自分を刺しかねなかった」

「……そんなに酷いん？」

「見に行くか？今頭から出血して酷い事になってるが」

「って！そないな事何でサラッと言うねん！せやったら血い流し過ぎで今気を失つとんのちゃう！？」

「……おお、そういう事もあるのか……」

「何でそんなに落ち着いてるんですか！？はよお見に行きますよ！」

俺は八神と一緒に急いでアニスの部屋に行く。

勢いよくドアを開け、そこに居るであろうアニスを見る。

「うわぁっ！？やっぱり氣い失つとる！？！？しかも血が止まってへん

「!?」

「ア、アニス!!」

……とにかく、アニスは死にたがりを発動しても、気を失っても、手が掛かる奴だと、今日身に染みた……。

~~~~~  
~~~~~

「いやあ、恥ずかしい所を見せちゃったね」

おはよう、つと書いても、もう夕方何だけどね。

何か一回気を失って目が覚めたら死にたがり消えてたよ。

「全く、心配掛けやがって」

「えへへ、ごめんねアंक。ほらほら、抱きしめて良いよ?」
「褒美ご褒美、キャハハ!」

「じゃあお言葉に甘えて……」

「ちよっ！？はやてちゃん禁止！胸揉んでくるから嫌だ！って、言ってる傍から！？あはははは！や、やめて！くすぐったいって！あはははは！」

「いやぁ！はやて胸揉まないで！くすぐりたいから！そして痛いから！……あぁ、やっと地獄から解放された……」。

「それで、どうなんだ気分は」

「うん、少し腫物が引いた感じだよ。でも、まだ全部晴らした気分ではないよ」

「……そうか」

「いやぁ、それにしても、些かマニャク過ぎたねあれ。まさか人生初のSM紛いな事をやるとは、しかも自分からアंकにやってって言うとか……あぁ、恥ずかしすぎて、過去の俺をぶん殴りたいよ」

「あはは、まぁ、頭から血を流しとったから、ウチは見る余裕無かったで」

「でも、もうあんな羞恥は嫌だよ……はう……」

「はあ、もう俺もこりこりだ……あんな姿見たくないは……」

「でも……アंकがしたいんなら……良いよ？」

「ええい！頬を赤らめて言うな！お前には羞恥は無いのか！いい加減俺をからかう癖を治せ！！」

「あははは！怒った怒った、キャハハハハ！！」

「じゃあウチがしたる！！」

「……丁重にお断りします」

はやてにさせたら死にそうなのでやめとくよ……ああ、今回は収集や纏まりがつかなかったけど……ま、これで良いつか！
それじゃ、また明日とか！

第十二話 アニスの異常性（後書き）

収集つかねー

後、
g d g d

さて、今回は短めでしたね……

明日はなのはとの絡みを書きたいです、それと、アングのバイトの話とかも……

ここまで読んでくださりありがとうございます

簡単なプロフィール

名前：アニス・クロイツベル

デバイス：クイーン

性別：アニス

バリアジャケット：ブリジットの格好、もしかしたら変わるかも

年齢（現時点）：九歳

魔力ランク：SS -

魔法の種類：ベルカ式、ミッド式、クロイツ式、ガッシュ達の呪文

スキル：死にたがり、魔具生成、???、???、

容姿

男の娘で、髪は伸ばしっぱなし。

精神が肉体に引っ張られ、口調は少し大人びてるものの、恥ずかしかったり悲しかったり、嬉しかったりすると、幼くなる。

武器：剣、杖、斬魄刀、???、???、???

考察

アニスの前世は童顔な男です。

死因は首吊りで、極度の死にたがり。実はこの世界に来てからは、その制御も理解してきたが、たまに箍が外れ、死にたがりモードに性格は温厚、と言うか、基本デレデレ、余りツンツンしたりはしない。そんな事もあってか、男女問わず落とします。

ゲイじゃない男の人も、その道にずるずると引きずりこむ。アंकが良い例です（笑）

友好関係は今の所、はやて、なのはのみ。

アニスにハーレム思想があるのかと言われれば、無いです。でも、アニスのキラースマイルや、寝起のアニスで落ちる子も少なくないのです！

基本、服装はパーカーにジーンズ。寝間着は裸ワイシャツにスパッツ。

三度の飯よりスパッツが大好きな変わった子、本人曰く、あそこまで動きやすい物はない、だとか。

好きな物はアंकに甘える事、褒められること、頭を撫でられること、はやての料理。

好きな者は、アंक、はやて、なのは。

嫌いな物は管理局、胸を揉まれる事はやてのみ

嫌いな者はクロイツベル一族（クラウドとアリスは除く）

このプロフィールは、編集、改変、項目増殖があります

名前：アंक

デバイス：グリード

性別：男

バリアジャケット：まだ本編未使用

年齢：????

魔力ランク：A A A +

魔法の種類：ミッド式

スキル：完全グリード化

容姿：オーズに出てきたアंकクそのもの

武器：己の体のみ

考察

アニスのパートナーにして守護騎士みたいな存在。
ツンデレだが、アニスを抱きしめるのが日課な、少し腐臭のする人。
完全作者が好きだったので、こういった立ち位置に……みんな、す
まん……悪気はなかったんだ……。

好きな物：アイス

好きな者：アニス、はやて

嫌いな物：特になし

嫌いな者：クロイツベル一族（クラウドとアリスは除く）、アリス
に害を成すもの

位ですかね。

短くてごめんなさい……まあ、これからも更新しまくるんで、応援
お願いします！

それじゃ、また明日とか！

第十三話 アンクのバイト先とアニス信者と歩く都市伝説（前書き）

いやあ、今日は雨が降ったよ

雨は最高だね、大好きだ

本編始まります

第十三話 アンクのバイト先とアニス信者と歩く都市伝説

アニスサイド

今日ははやての診察の日……何だけど……。

「あーうー……ごめんねはやてちゃん、俺の背が小さすぎだから、車いす押せなくて……」

「あはは！そんな事気にしてへんで、アニス君。その心遣いだけで嬉しいで」

「……はう……」

「ああもつかわええな！！大丈夫やて、アニス君達が来る前は、自分一人で行って帰って来てたんやで？」

そう言われると……少し空気が重くなるよはやて……。それにしても、アンク何処行っちゃったんだろ？朝起きたら既になかったし……。

「ねえはやてちゃん。アンク何処に行ったか知ってる？」

「あれ？アंकさんならバイトに行ってたけど……」

「……何それ初耳……」

アंकめ！俺に内緒でバイトを入れたんか！せつかくの休日、俺が朝から活動できる限られた時間、今日はアंकとイチャコラしてやるうかと思ってたのに！！

とは思ってないですよ？流石に、俺にいバイトが決まった云々の所だけ本当だけど、後は嘘だよ？

だって、俺が無理言って働いてくれてるんだし、仕方ないよ。

でも、言ってくれよ。気になるじゃんか。

「はやてちゃん、アंकが何のバイト始めたか知ってる？」

「いや、知らへんな。何も言っへんかったし」

アंकえ……お願いだから言わないってのは止めてください……。

「よし、探してみよう」

アंकの魔力を辿れば、何とか辿り着けると思っただ。
でも……はやてがな……。――

俺は考え事をしてはやてをチラッと見、また考え事をしては、チラッとはやてを見……それを数度繰り返す。

「ああもつかわええなあ！！そう何度もチラチラ見んといて！探して来れば良いやん。アニス君の事や、魔法かなんかで探ってみるんやろ？」

「あはは、まあ、当たらずも遠からずだね。ただアंकの魔力を辿ってみようかなって考えてた所」

「行つてきてええよ？ウチは気にせえへんから」

「……もう、何て言うか……はやてちゃん大好きだあああ！」

「ウチもやああああ！」

テンションたつか。

あ、俺もか。気にしない気にしない。さて、行きますか。

「ごめんねはやてちゃん、今度俺が付き添うから！それじゃっ！」

俺はダッシュで玄関に向かおうとしたら、はやてちゃんに手を引っ張られて止められる。

「キャッ!?!.....は、はやてちゃん.....肘抜ける.....痛い.....」

「あ、すまへんな。でもアニス君、その恰好は駄目やって、アंकさんも言ってたやん。スパッツはええ、だけどその上!ワイシャツは脱ぎい!そしてちゃんと服着い!」

「あ、そうだった。まだ寝間着のままだったっけ。えへへ、うっかりうっかり」

~~~~~  
~~~~~

「さっ!行くか!」

「ほな、行つてらっしゃい」

「うん!」

あの後俺は速効で着替え、アंकを探すミッションに向かう。
え？今日の服装？ふっふーん、良くぞ聞いてくれた！今日の服装は
上が普通のパーカー、下はスパッツにニーソックス！そこ！ロウキ
ゅーぶとか言わない！！そして女装じゃねーよ？うん、違うから。

「ああ、アニス君アニス君……ハアハア……生足もええけど……あ
のチラツと除く太もももええ……」

後ろに居る変態は氣にしない。鼻血出し過ぎて倒れないでね？

「ふんふふーん」

うん、やっぱりどうどうと青空の下を歩くのは、気分が清々しくな
って気持ちいいな。

学校、通ってみようかな？でもでも、アंकやはやてに迷惑や負担
が掛かつちゃうし、諦めよう。

「……………むい？」

目の前にぬこはけーん。さて、何をしようか？

先ずお腹をもふもふする……それから……っと、いかんいかん。今
はアंकだ。

俺はぬこをスルーして歩き出す。

飼いたいな、ぬこ飼いたいな。にゃーにゃー。

「さて、真面目に探そう」

俺は少し集中し、アंकの魔力を探る……。

……うん、ここからもう少し行った所に魔力を感じるな……でも、反応が二つなのはな何故？

まさかなのはの？はははー、まさかー、アंकが喫茶翠屋でバイト何て、ありえないでしょ。

そう思っていた時期が、俺にもありました……。

ドンっ！

「……あはは……」

着きましたのは喫茶翠屋……その中にアंकの魔力が感じられる……。

「あー、あの子可愛い」

「本当だー、お母さんのお使いかな？」

道行くお姉さん方、これでも男なんだぜ？こんなナリして、男なんだぜ？

まあ、冗談はさて置き、中に入らん事には始まらない。

カランカラン

相変わらず、良い香りがスツと鼻に入ってくる。

良いねえ、やっぱ調和だよ調和。パーフェクトハーモニー完全調和！そう、それだ！

「いらっしよ……」

「……ほう……」

そこには、いつも見慣れた奴が、見慣れない格好で、営業スマイルを浮かべていたアंकが居た。
が、俺だと分かるや否や、顔が引きつる。

「……アंक……」

「……何だ……」

「……グッジョブ……」

「うるせえ！だからお前達には教えなくなかったんだ！特にアニス！！て言うかスパッツ脱げていっつも言ってるんだろ！！」

「アंकのウェイター姿！いただきました！！だからスパッツは俺のジャスティス！！」

「帰れえ！！そしてズボンを穿け！女みたいな格好してんじゃねえ！！」

「いやはや、まさかアंकが喫茶翠屋でウェイターとしてバイトするとか……」。

「ああ、アंकはどんな姿させてもカッコ良いなあ……。て言うか、心外、これは女装じゃないんだよ？」

「アंक君、どうしたの？そんな大きな声出して」

「あ……何でも……ない……」

「？あらー、アニス君じゃない。こんにちは」

「桃子さん、こんにちは！」

「今日はどうしたの？またお菓子買いに来てくれたの？」

「ううん！今日はアंकをからかいに来たの！」

「てめえ！やっぱそれが目的か！」

「だって、アंकバイト入れたのに教えてくれないんだもん。だから探しちゃった テヘペロ」

「ええい！帰れ！八神はどうした！？お前と病院行くとか言ってたぞ！？」

「もちろんはやてちゃんには無理を言っちゃいました アニスたん
つたら強引」

「八神いいいいい！！！」

「ア、アंक君、落ち着きましょう！？アニス君も煽らないの！」

「ハア……ハア……すいません……」

「ごめんなさい」

さて、若干俺も歯止めがきかなくなっただけであつたが、そんな事はなかつたぜ！

「それで、アニス君とアंक君の関係は？」

「結婚を前提に付き合つてるんです」

「馬鹿か！」

ドスッ！

「っ！……っつゝ、アंकく、冗談なんだから……一々殴らないですよ……」

「ふんっ。ただの兄弟だ……です」

「ぶっ、アंकったら、敬語下手だね」

「うるせえ」

「兄弟にしては……似てないわねえ」

「まあ、気にするな……です」

嘘だから仕方ないんだよ桃子さん……。

でも、アंक金髪だから案外外人に見えるし……大丈夫かな？

「さて、お話はこれ位にして！アंक君、仕事仕事！」

「了解だ。それじゃ、俺は戻る」

「分かったよ」

そう言うと、アंकは仕事に戻って行った……。

桃子さん？何で貴女は俺の隣に居るのですか？貴女も仕事あるんじゃないんですか？

「それにしても、アニス君は相変わらず可愛いわねえ」

「あはは、褒め言葉として受け取っておきますよ」

「あ、そうだ。なのは呼んでみましょうか。アニス君も久々にお話ししたいんじゃない？」

桃子さん、それは要らんお節介なのですよ。
つてああ、なのは呼ばないで！いやだ！止めて！

「はい、どうしたのお母s……」

「や、やつほー……」

なのはは何故かいきなり無言になり、数秒後、つかつかと俺の所に来る。
しかも無言でだ……。

「アニス君……」

「な……何……かな？」

「……お持ち帰りはしてますか？」

「当店のアニスは、テイクアウト禁止です」

「でも持ち帰るの!」

「いやあ!止めて!?!引つ張らないで!?!桃子さん!貴女はあらあらみたいな顔で見ないで助けてください!!!」

「もうアニス君可愛い!!そうだ!お母さん!ウエイトレスの服って確かあったよね?あ、でもサイズ無いんだっけ……」

「ふふふ、なのは、その点は抜かりないわ!ちゃんとアニス君用のウエイトレス服を用意しているわ!」

「ちよっ!いつ俺のサイズ測ったし!?!」

「アニス君。身長は95?、体重は19キロ。それ位で大体は出来るわ!」

「俺ですら知らない身長と体重を知ってる……だと……つつか俺100?も無かつたんだ……orz」

せめて100？は欲しかったな……もう伸びないだろうね。八歳辺りからもう成長止まって来てるし……神様、あんた極端だよ。

「さあ、着替えるの！」

「……有無を言わさぬその言動……」

流石魔王となりうる器……ははは、君の願いは断れないです。

「はあ……とうとう女装か……」

もう、何も思っまい……。

~~~~~  
~~~~~

「うわー、アニス君可愛い」

「あはは、ありがとう……」

着て来たお……スパッツが無かったら即死していた。
ははは、サンキュースパッツ！！

「うおおー！可愛いぞお！」

「あれが男……だと……」

「違う！第三の性別！アニスだ！」

「うおー！アニスたん！俺だ！けっく「言わせねえよ！？」」

「……何ぞこれ……」

何か、いつの間にか翠屋がこんな事になってるお……。
つつか何で俺の名前知ってるし……。

「あれ？アニス君知らないの？」

「へっ？何が？」

「アニス君、海鳴市では都市伝説みたいになってるんだよ？九歳と

は思えない大人びた口調、それに見合わない身長に、凄く可愛い。
なのに男の子！って感じてね」

「なん……だと……」

この俺が、都市伝説化……だと。
某とあるの、超能力が効かない男、脱ぎ女みたいに……歩く都市伝説化しただと……。

「……てめえら帰れ！」

「アニस्ताーん！」

「男勝り……ハアハア……いや、男か」

「もう男でも女でもなんでも良い！けっく」だから言わせねえよ！
？」

「……はぁ……どないせいつちゅうねん……」

「……」パシヤッパシヤッ！

何かバカテスのムツツリーニみたいな奴が、鼻血を出しながら写真撮ってるんだが……。

「なっ……あいつは!?!」

「ああ、間違いない……奴だ……」

「ゲンドウ乙」

「アニスさんに並ぶ、もう一人の歩く都市伝説……」

「……寡黙なる性識者」
ムツツリーニ

「……………」ブンブンブンブン!

「分かりやす過ぎなのに!頑なに否定してるぞ!?!」

「流石はムツツリーニ!」

お前、この世界でもそう呼ばれてるんだな……バカテスに帰れ。

「ね、ねえ、君名前は？」

「……………土夜孝太^{じやこうた}……………」

漢字が違っただけじゃねえか！！
ありえねえ……………この世界、何でもありか……………。

「よ、よろしく、土夜君」

「……………できたら孝太と……………」ブシャアアアア！

「こ、孝太君……………？」

「……………悔い……………なし……………」ガクッ

「ムツツリイイイイニイイイイ！！！」

「な、なんて事だ……………スカウターが壊れた……………だと……………」

アंकは何処からか大きな上の服を持ってきて、俺に掛ける。
……えへへ……アंकは優しいな、まだバイト中なのに。

「……えへへ、アंकありがとう」

「……ふん……」

鼻を鳴らして、アंकはまたバイトに戻る……。

「アニスたんが……ハニカンだ……だと……」

「奴は誰だ!？」

「はっ!数日前からこの喫茶翠屋でバイトしてる、アंकと言う男です!女性客に人気があるイケメンでございます!」

「異端会議だ!」

「戦争だ!!」

「アンク×アニス…… ありだと思います……」

今度は日傘を差した子が現れたぞおい…… 今度は西園さんかコノヤロ―。

髪の色、若干被ってるじゃねえかコノヤロ―。

「…… アニスさんは、好きですか？」

「…… 何が？」

「…… 男と男の、濡れ場ですよ」

「…… あはは、ごめん、分からないよ」

「…… そうですね…… では、また今度、何処かでお会いしましょう。
貴方は完全に、こっち側ですから」

そっち側ってどういう事さ！？ 怖い！ この子怖い！
ヤバイ、やっぱりこの子、あの某小さな破壊者に出てくるあの子だよ！

「あ、名前聞いても…… 良いかな？」

「……にしそのみお仁紫園漣です」

この子も漢字が違っただけか！？本当に何でもありだな、この世界……。
まさか、バカテス、リトバスと来ましたか……。
何だか、今日は疲れたよ……。

「にやはは、お疲れ様アニス君」

「張本人の癖に……ちゃっかり自分は安全地帯に居るなんて……酷いや、なのはちゃん」

「にやはは、ごめんごめん。でも、まさか宣伝して数分で、あんなになるとは思わなかったんだよ」

「……宣伝したの？」

「うん！」

「……頭痛くなってきちゃった……取り敢えず、なのはちゃんは極刑ね」

「ええ!？」

何となく、なのはちゃんは俺と同じ苦しみを味わってみたいよ。
さっきの苦労が分かるよ？

いきなりたん付で呼ばれるわ、写真は撮られるわ、拳句の果てには
求婚だよ？

もう、俺は疲れた……、帰って寝る。

~~~~~

取り敢えず、あれから着替えて帰りました。

あ、ちゃっかりムツツリー二と仁紫園さんとは仲良くなったよ？  
—  
応メルアド交換しました。

「ああ、疲れた」

「お帰りアニス君。それで、何でそんなに疲れとるん？」

「いやあ、ちよつとね。アंकのバイト先に着いたんだけど……そ  
こで着せ替え人形みたいにされちゃって……」

「……ほう、それは興味があるなあ……」

「興味持たないですよ。それで、アंकは喫茶翠屋でバイトしてたんだ」

「……マジかいな……ウェイターとして？」

「うん、そうだよ」

「はーっ、さぞカッコえんやろっな」

「うん！それはもうカッコ良かったよ！」

「うわっ、惚気や惚気」

「もう、からかわないですよ」

「……ぶっ、あはははは！冗談や冗談！さっ、夕飯の支度しよか」

「そうだね。俺もやる！」

「オーケーや」

そんなこんなで、今日はアंकが帰ってくるまではやと一緒料理を作りました。

いやあ、もう何か……女装って怖いねえ。

第十三話 アンクのバイト先とアニス信者と歩く都市伝説（後書き）

はいっ！やり過ぎました！

バカテスの土屋好きなんで、出しちゃいました！まあ、漢字は変えてますけどね

後は西園さん……

リトバスの中ではキャラが好き、でも好みではない

まあ、この子も漢字変えて出しました

ごめんなさい……でも、これからもちよく絡んできます。でも魔法は使いませんよ？

お友達です、そう、ただのお友達ですよ……

て言うかムツツリー二の女装で、俺は落ちたんや……可愛い……何だあいっ……マジ可愛い……と

西園さんは、まあ……キャラが好きただけであってですね、好みで言ったら美鳥の方が好きです

つつか姉御やはるちん、クドやこまりんの方がええねん

後は理樹、あいつは可愛い

つつ訳で、自重しきれなくなっただんで、終わります

ここまで読んでくれてありがとうございます

#### 第十四話 別荘と修行（前書き）

よっすー

いやあ、来週は忙しいので、もしかしたら一旦更新が止まるかもしれません

まあ、余裕があつたら予約投稿してみようかなとか思ってます

でも、番外編です

来週の水、木は居ませんので、更新できるのは月、火、金です

そして、日曜日は何かウチのバカ先公が、牛を借りて何かに出品するので、お前ら泊りなって言われました

死ね、市ねじゃなくて死ね

お前らの勝手な行動で、困るのはうちら何だよ、勝手に変な予定入れんな屑教師

つと、キャラが変わっちゃいましたね、すんませーん

そんじゃ、本編始まります

## 第十四話 別荘と修行

アニスサイド

「アンク、少し別荘で鍛えてこようと思うんだ」

「……そうだな。次の儀式にも備えておきたいし。なら、俺も行く」

「でも、そうになったらはやてが一人になっちゃうな……」

「そうだな。はやてはもう魔法の事は知ってるし、どうせなら連れて来る？」

「あ、でもまだ寝てるんだもん、て言うか、俺達が今日起きるの少し早過ぎた。」

「ん、じゃあザゼルさんでも呼んでさ。はやてが起きたら連れて来るように言う？」

「……俺はあんまり、というか凄くあいつの事は嫌いなんだが……」

「そう？俺は結構面白い悪魔さんだなんて思うよ？」



「その前に、お前は少し貞操の危険を覚えるよ……」

「……………アंकは俺の初めて……………欲しいの?」

ドゴッ!!

「ひゃうつ!?!」

「ガガガガ、ガキが益せた事ととと、言ってんじゃねええええええええ!?!」

「……………あう……………洒落になって無い位に……………痛いよ……………はうつ……………」

思いきり頭を殴られた……………。

あうあう、過去最高の痛さだねコレ……………アニスたん、痛さのあまり泣いちゃう……………。

「あうあう……………酷いよ」

「うつ……………す、すまん、少し強く殴り過ぎた」

そう言っアアアはアアアに俺の頭を撫でてくれた。  
うんーやっぱアアアは優しいの！

「えへへ、アアアの手は落ち着くから大好き！」

「……ふん……」

あから照れちゃった照れちゃった。でも、ちゃっかり頭を撫でるのはやめないんですね……。

まあ、ツンデレなアアアちゃん。

「さて、ザゼルさん呼んじゃおっと。使い魔召喚、ザゼル！……さん……」

一応考慮してさんを付けたよ……いや、何か付けなきゃ悪いかなって思っただけ……結構語呂悪くて驚いた。  
まあ、当然の結果か……。

そう思っていた時、急に床が光だし、魔方阵が浮き出る。そしてその中心から、ザゼルさんが現れる。

「……………あつ、アニス君じゃありませんか。お久しぶりです。全く、あれ以来一度も呼んでくれなくて、結構寂しかったんですよ？もしかして焦らしですか？アニス君はそっちの趣味があるんですか？それならそうと早く言ってくれば、私はどっちでも行けますよ？それと、食べても良いですか？」

「……………アニス、やっぱ帰ってもらえ……………」

「うん……………そうだね……………」

「ああ、嘘です！嘘嘘！全く、冗談に決まってるじゃないですか」

ほ、ホントにそうなんだろうか？

少なくとも、目がマジだったんですけど……………。

「それより、今日は何で呼び出されたんですか？」

「あ、そうだった。あのねザゼルさん、今日俺とアンクは別荘に行つてちよつと修行してくるから、はやて……………この家の主人が起きたら、別荘に連れてきてほしいんだ」

「ふむ、別荘ですか……………あれ？でも、ここは人間界ですよ？アニス君は違う世界出身……………だったら別荘って、その世界にあるんでし

ようか？だったら、私は長距離転移は出来ませんよ？」

「ああ、違うよ。別荘ってのは、俺が作った魔法空間……みたいなものかな？今見せるよ」

パチン。

俺はザゼルさんにそう言った後、指を鳴らして空間を裂く。これには魔力が必要ないから楽だな。何か適当にやったらまた出来たって感じなんだよね。

「さて……ここらへんに……うわっ、出てきちゃ駄目！あっ、お前も！あ、コラ！共食い禁止って言っただろ！……おっ、あったあった」

（（その中に、一体何が居るんだ（です）））

アंकとザゼルは、互いにそう思ったとか思わなかったとか……。

「じゃじゃーん！ダイオラマ魔法球！」

「……ただのミニチュアの塔が入ったガラス球にしか見えないので

すが……」

「えっへん！説明しよう！これはダイオラマ魔法球と言い、外見はただのミニチュアが入ったガラス球にしか見えないけど。実はこれ、魔法で作った異空間何だ。これをセットして、中に入ると、こっちの世界が一時経った時、こっちの中では24時間経過してる事になるんだ」

「へえ……アニス君は凄い物を作るんですね……それで、その中に入って修行すると」

「うん、そうだよ」

「……それ、女性が入ったら大変な事になりますね」

「ああ、年齢でしょ？そこは大丈夫！歳を取らないようにしたから！これで女の人でも気兼ねなく使えちゃう！さて、これで説明終わるけど、任せても大丈夫？」

「はい、任せてください。では報酬は……もちろんアニス君の体で……」

スパン！

「お前は自重を知れ！」

「っっ……何ですか？焼きもちですか？」

スパンスパン！！

「……次言ったら、お前の顔に火炎弾を放ってやる……」

「……すいませんでした……」

アंकが計三発、ザゼルさんの頭を殴ったお……。しかも最後は顔に手をやり、脅すと言う暴挙……ザゼルさん、ごめんなさい……。

「そ、それじゃあ、俺とアंकは行くね？よろしく」

俺はそう言って、別荘の中に入る。アंकも続いて入る……さて、久々だな。

~~~~~

~~~~~

ザザー！ザザー！

「……いやあ、着いた着いた……さて、アंकが来るまで、軽く動いとくか」

最初に入った人の次に入った人がここに来るのに、何分かのタイムラグがある。  
だから、数分は少し体を動かせる。

あ、因みに、本家のダイオラマと到着地点変えてるよ。  
だから、いきなり目の前が海なんだ。

「さて……ラウザルク！」

ドゴオッ！！

雷が俺に降り注ぎ、俺の体は光だす。

……うし、身体強化は終わりつと……、俺のラウザルクの効果時間は一時間程度。本編のガッシュは30秒くらいだっけ？  
そう考えると、すげえ長いな。まあ、これ使つてると他の呪文が使えないのが難点だね。

まあ、それでも斬魄刀と合わせれば、結構良い線まで行く。

「瞬歩！」

シュン！ザッ！

「……うん、まだ大丈夫そうだね。まだまだなまってはいないね」

これでも結構久々なんだと、瞬歩使うの。

しかもラウザルクを使いながらだから、制御難しいな……やっぱり定期的に使わないと駄目だね。

「ラウザルク解除つと……さて次は……」

次にやる事を考えていたら、すぐ後ろで着地音が聞こえた。振り返るとそこには、アंकが居た。

「やあアंक、遅かったね」

「俺が入ったのは今さっきだ、それで遅いと言われても困る」



「だよねー。それじゃ、体を温めたいし、軽い戦闘やろうよ?」

「分かった。それじゃあ完全グリード化は後か……」

そう言いながらも、翼を生やし、右腕をグリード化させる。仕事はええっすアंकさん。

俺も、自分の身体能力だけでアंकと戦う。

「それじゃ……」

「……行くぞ!」

ドンっ!!

俺とアंकは同時に飛び出し、ぶつかり合う。

先ずアंकは右手で殴ってきたが、俺はそれを簡単に払い、蹴りを喰らわす。

だけどアंकは空いている左手で受け流し、再び右で殴ってくる。

「甘いよ!」

俺はスタントマン顔負けの避け方をし、そのままアंकの足を蹴る。

「ちいつ!!ハアッ!」

「くっ!」

アंकは蹴りを食らいながらも攻撃をしてくる。

俺は意表を突かれたが、それを難なく受け止める。

「ったく、ただの身体能力だけで、この俺と互角……いや、少し上位か……」

「えへへ、アंकに褒められちった」

「隙あり!」

「キャッ!」

俺は足を払われ、尻餅を付く……痛い。下砂だけど、案外痛い……。

「もっ、酷いじゃん」

「油断したお前が悪い」

「ぶー……ああ、スパッツが汚れちゃったよ……これ寝間着のなの……」

結構砂着いちゃったな。

まあ、洗えばいいか。取れる取れる、大丈夫大丈夫。

「じゃあ脱いで普通のズボン履いてこいよ!」

「ですよー。んじゃ、ちょっと変えてくるわ」

俺はアंकにそう言い、館の中に飛んでいく。

まあ、この中には一応着替えも詰め込んでるし、住めるようにはしてる。

ただ今館の中の俺の部屋の中ですよ……ややこしいな……。

「さてさて……何を穿いたら良いやら」

俺の目の前には、所狭しとスパッツが仕舞ってある。  
アंकクに見せたら全部燃やされそうだ……見せないでおこつ。

「おつ、これは……」

半ズボン、それに半袖タイプのパーカーもある。

……うん、そうだね、今日は思い切って涼しい格好しよう。上は今  
長袖タイプのパーカーだからね。

じゃあ、半袖も脱いじゃお、ネギま本編でネギやコタローがしてた  
格好に俺は着替える。

まあ、ちょっととあるの土御門みたいになってるのは……気にしな  
い……。

「アंकク、お待たせ」

「おお、そんなに待ってない。それと、もう来たぞ？」

「ん？……ああ、はやてちゃんか。それで、今何処に？」

「……そこ……」

アंकが指を差した方向を俺は向く、そこには……。

「アニスくん！ウチ、飛んでる〜！」

何故かザゼルさんに背負われて空を飛んでるはやての姿が……どうしてこうなったし……。

まあ、そこは置いというて。

「ザゼルさん！！はやてちゃんをこっちに〜！！！」

「あ、分かりました〜！」

何とか俺の声が聞こえたようだ。ザゼルさんは言葉を返してくれると、すぐにこちらに飛んできて、はやてを下ろしてくれる。因みに、車いすはどうしたの？

「うわぁ……ここがアニス君の別荘なん？南国見たいやわ〜。そしてアニス君！」

「ど、どうしたの？」

「生足サイコーや！！それに、上が半袖のパーカーのみって……も

う痴女にしか見えへんで？」

はやてが顔を赤くしながら言う。

いや、痴女って……俺は男だから、そこは間違えないでね……そこ、アंकも顔を赤くしない。後ザゼルさん、舌なめずりをしない。

「な、なあ……アニス君……ハアハア……胸揉ませてくれへん？ハアハア」

「嫌だよ！？何で揉まれないといけないの！？というか車いすはどうしたの！？」

「あ、車いすなら、ここに」

ザゼルさんは懷に手を突っ込むと、いきなり車いすがニュツと出てくるってっええええええええええ！？

何で！？何で何で！？何で懷に車いすが入ってんの！？おかしいよ！？

「はい、八神さん」

「あ、ありがとうございますザゼルさん。それよりも！いきなりザゼルさんがウチが起きた時に現れたんはびっくりしたで！お願いだ

から、ウチに一声かけてからにしてな？」

「あははは、ごめんねはやてちゃん。はやてちゃんまだ寝てたから、仕方なかったんだよ」

「まあ、今日は許したるわ。こんな綺麗な所に来れたしな！」

「そう言ってくれと、作ったかいがあったよ。まあ、修行用に作っただけなんだけどね」

「へえ、アニス君は凄いんやな。それで、今日は修行する為に入ったん？」

「そうだよ」

「じゃあ、ウチは必要ないんじゃない？」

「いや、黙って入ったらはやてちゃん心配するだろうから。どうせなら連れて来た方が良くたって」

「……アニス君……」

はやては何故か熱視線を俺に向けてくる。  
いや、俺普通に善意で言ったただけなんだけど……そんな熱い視線を俺に向けないで……。

「さ、さて。それじゃあアंक、再開しようつか。あ、ザゼルさんははやてちゃんに着いてて？」

「分かりました」

俺ははやてをザゼルさんに任せて、アंकと一緒にはやてと少し離れる。  
巻き込んだじゃったらあれだしね。

「……それじゃあアंक、本気で来て。俺も本気で行くから……」

「分かった……ハアアアア!!」

アंकは魔力を込めて、完全体のグリードのなる。アंकは自分の体を見て、こう言う。

「完全体のなるのは何年振りだ、最近じゃ、普通に翼と右腕だけで戦ってきたからな」



「あはは、ごめんね。アंकも定期的にその姿になれば良いんだけど、そうもいかないしね。ごめんね」

「気にしないから安心しろ。さて、サッサと構えろ」

「まあ、待つてよ。斬魄刀出すから。……来い」

俺は、まだ始解をしてない斬魄刀を取り出す、え？今日は何の斬魄刀何だつて？

まあ、始解してからのお楽しみ。まあ、もうするんだけどね。

「舞え、袖白雪！」

「ほう、それか……」

本当は氷輪丸を使いたかったんだけど、それじゃつまらないし、氷雪系だったらランク落ちてる奴が何本かあるから、今回はお休み。だから袖白雪を使う事にした。うむ、相変わらず美しいなあ。

「それじゃ……」

「第二ラウンド……」

「「開始!!」」

俺とアंकはまた同時に駆け出し、ぶつかり合う……。  
模擬戦……開始します。

## 第十四話 別荘と修行（後書き）

gg gga

gg ggaやね

gg gga

もう、今回が一番駄作なんじゃないかと……

それにしても、アニスは可愛い

生足サイコーですね！俺、足フェチなんです……後は髪フェチと腋フェチです

髪は良いが、後はマニアックですね

まあ、気にしない

今回はコレのはやてサイドから書きたいと思います

まあ、短いと思いますから、明日は更新で来たら二つ更新します

では、ここまで読んでくださりありがとうございます

## 第十五話 はやて視点と模擬戦（前書き）

やあ

これと言って、話すことは無いね

あ、そうそう、今日は水曜日にあげる番外編を書き終えたよ

明日は木曜日にあげる番外編を書き上げなきゃ

それじゃ、本編始まります

## 第十五話 はやて視点と模擬戦

はやてサイド

朝起きたら、知らん人がウチの顔除きこんどった時は凄く焦ったで。不法侵入者かドロボーさんかと思って、心臓バクバクやったで。

まあ、起きてすぐに、アニス君の使い魔言うてたから、落ち着いたんやけどもな。それにしても、やつば魔法って凄いんやな。

ザゼルさん……やったつけ？この人がいきなりウチの車いすを持ち上げて懐に入れたん見たけど、質量保存の法則無視やな、魔法って

それからウチを抱えて、そのままアニス君の部屋に、入ってもうた。中には誰も居なくて、ミニチュアの家が入ってるガラス球が置いてあるだけやった。

「行きますよ？八神さん」

「へっ？行くってどこですか？」

「勿論、アニス君の所にですよ」

そう言っ、ザゼルさんとウチは、何処かに飛んだ……。それは一瞬の出来事やった。今まで見慣れた部屋におったのに、いきなり周りは南国みたいな所に……。落ちとる？

「何でやあああああああ！！」

「おっと、設定違いですかね？まあ良いでしょう。よっと」

軽い口調でこの状況を物ともしていない様子。

「どうしてそんなに落ち着いとるんですかあああああ！！」

「え？いや、落ちてるんなら飛べばいいじゃないですか」

ザゼルさんがそう言っ、ウチらに掛かった重力が無くなり、そのまま空中で止まる。

……ああ、そうやった、そう言えば……空飛べばええんやったな……  
…ウチは飛べへんけど。

「おっ、どうやらちょうど、アニス君が戻って来たようですね。何

処に行っていたのやら……」

「何か……いつものアニス君と違う気が……どないしたんやろ……」

「まあとりあえず、こっちに気づいた様なので、声を掛けてあげてください」

「はいな」

ウチはザゼルさんに言われたとおりに、アニス君に声を掛ける。

「アニスくん！ウチ、飛んでる〜！」

ウチが飛んどうる訳じゃないけどな。  
でも、空を飛ぶのって気持ちええなあ。

「ザゼルさん！！はやてちゃんをこっちに〜！！」

「あ、分かりました〜！」

アニス君は大声でザゼルさんをこっちに呼ぶ。



ザゼルさんはアニス君の言葉に従い、下に居るアニス君の所まで下りてくれた。

そして、ウチはアニス君に率直な感想を述べる。

「うわぁ……ここがアニス君の別荘なん？南国見たいやわ。そしてアニス君！」

「ど、どうしたの？」

「生足サイコーや！！それに、上が半袖のパーカーのみって……もう痴女にしか見えへんで？」

そつか！これが感じた違和感や！

いつもアニス君はスパッツを穿いとったのに、今日はスパッツやのうて半ズボン！しかも上半身はパーカーのみで、半袖すら来ていない。それに、前も開けとるので、上半身は実質裸や……。

「な、なあ……アニス君……ハアハア……胸揉ませてくれへん？ハアハア」

「嫌だよ！？何で揉まれないといけないの！？というか車いすはどつしたの！？」

「あ、車いすなら、ここに」

つと、ついつい暴走してもうた。

アニス君は男の子やのに、どうしても胸揉んじやうねん。なんでやる？反応が面白いからかな？

でも……胸揉まれてる時のアニス君の可愛さときたら……ハアハア……つと、いつの間にかゼルさんが車いすを出してくれた様や。

「はい、八神さん」

「あ、ありがとうございます。まずゼルさん。それよりも！いきなりゼルさんがウチが起きた時に現れたんはびっくりしたで！お願いだから、ウチに一声かけてからにしてな？」

「あははは、ごめんねはやてちゃん。はやてちゃんまだ寝てたから、仕方なかったんだよ」

そうねん、一言くらい声かけえ！

幾らウチが寝とつても、起こすなりなんなりすればええんや。でもまあ、今日はこんな綺麗な景色も見れたし、チャラやな。

「まあ、今日は許したるわ。こんな綺麗な所に来れたしな！」

「そう言ってくれると、作ったかいがあったよ。まあ、修行用に作っただけなんだけどね」

「へえ、アニス君は凄いいんな。それで、今日は修行する為に入ったん？」

「そうだよ」

「じゃあ、ウチは必要ないんじゃない……」

「いや、黙って入ったらはやてちゃん心配するだろうから。どうせなら連れて来た方が良くくなって」

「……アニス君……」

ヤバイ、ウチ今顔絶対赤い……全くアニス君は、天然のジゴロやで……。

ちっちゃくて、可愛くて……もう非の打ちどころがないわ！！

「さ、さて。それじゃあアंक、再開しようつか。あ、ザゼルさんははやてちゃんに着いてて？」

「分かりました」

どうやら今から訓練を始めるらしい。

ウチはこの場に居たら巻き込まれるんやろうな……せやから今、隣にザゼルさんが着いとる。

それに、アニス君とアंकさんは念のためなのか、ウチと距離を取る。

「……それじゃあアंक、本気で来て。俺も本気で行くから……」

「分かった……ハアアアア！」

アंकさんがいきなり力を籠めたら、アंकさんは鳥みたいな怪物……いや、アंकさんに失礼やね……何て言ったらええんかな？取り敢えず、変身した。

アंकさんはその姿になるのは久々なのか、自分の体を隅々まで凝視する。

「完全体のなるのは何年振りだ、最近じゃ、普通に翼と右腕だけで戦ってきたからな」

「あはは、ごめんね。アंकも定期的にその姿になれば良いんだけど、そうもいかないしね。ごめんね」

「気にしてないから安心しろ。さて、サッサと構えろ」

「まあ、待つてよ。斬魄刀出すから。……来い」

今度はアニス君が何かを取り出した……と言うよりは、いつの間にか刀が一振り握られとった。

しかも抜き身や……あんな、今にも折れそうな刀で戦うんかな？

「舞え、袖白雪！」

「ほう、それか……」

そう思っとなら、刀はいきなり姿を変えてもった。

全部白一色になり、柄の下部分には、布みたいな物がついとる。

「……綺麗や……」

そう、その刀は……凄く綺麗やった……。

ただ白一色の刀やのに、それがまるで……キラキラ光ってる様に見える。

「それじゃ……」

「第二ラウンド……」

「「開始!」!」

二人が同時に動き出す……砂を蹴り上げて、二人は戦いを始める。

~~~~~

アニスサイド

「ハッ!」!」

ブン!

「甘い!」

バキッ！

「クッ！

俺はアंकに斬りかかり、攻撃を開始する。

アंकは俺の初撃を避けて、がら空きの体に蹴りを放つ。

俺はそのまま吹っ飛び、砂に突っ込む。うえ、口に砂入った……。

「ぺっぺっ！うえ、じゅりじりする……」

「ハア！」

ドンドンドン！！

アंकは火炎弾を三発出す。ちいっ！間に合わない！

「ウンデトリギンタビオワネウネメーマリク・ラク・ラ・ラック・ライラック！ギカセリエス オブスクーリー闇の精霊3柱！魔法の射
手連弾・闇3矢！！」

俺はサギタ・マギカでアंकの攻撃を撃ち落とす。

まあ、後に思ったんだけど、ガッシュに出てくる氷か水系の呪文で撃ち落とせば良かったって思ったよ。

「はっ！そう来ると思ったよ！」

砂煙に紛れて、アंकは突っ込んでくる……。
ふっ、甘いねアंक……。

「アंक、久々過ぎて、袖白雪の攻撃方法を忘れちゃったかにゃ？」

「何？……しまった！」

アंकは一気に俺と距離を縮めるスピードを落とす。
だけど、もう遅いよ！

「初の舞月白」

カツ！！

アंकは、俺が仕掛けておいた月白の領域に、足を一歩踏み出して
いた。

右足は氷、右手を同様に凍り付いてしまった。

「ったく、まさか……俺の技を避けた際に、もう仕掛けておいたのか」

「えへへ、正解！さっ、どうする？」

「はっ、まだだ、まだやるに決まってるだろ？フン！」

バリン！！

アंकは右足と右手に力を入れて、氷を砕く。

まあ、危ない事すんな。もし間違えたら、お前の腕と脚、粉々だよ？まあ、グリードだから大丈夫なのか？
まあ、分らん。

「さあ、次はどう攻める？」

「……それじゃ……ソルセン！」

ブン！

呪文を唱えて、俺は刀を振るう。
ソルセン、アースが使っていた呪文。剣から剣閃と共に実体となっ

た刃状のエネルギーを放つ呪文。

攻撃方法が三つしかない袖白雪との相性は結構良い。

手札がグンと増えるし、使いにくい月白も、これで時間を稼いで使う事も出来る。

アंकはその斬撃を避けるが、俺は既に動いている。

「ウルソルト！」

「ちいっ！」

俺は剣撃の速さを上げる呪文を唱える。

もはや普通の人間には視覚出来ない速度に上がっている……そう、普通の人間には見えない……。

ガシッ！

「……ふう、これが斬月だったら、俺の手は斬られて無くなってるな……」

アंकが、刃に触れないように袖白雪を掴んで攻撃を防ぐ。

「さっすが」

「当たり前だ。完全体を甘く見んな!!」

バキッ！

「クッ！ハアッ！」

アंकの蹴りを受け止めて、俺は袖白雪を握っていた右手を開き、袖白雪を捨てる。

掴まれちゃままだったら攻撃も何も出来ないしね。

「ふん。今度は素手か？」

「そのまさかさ！」

俺はボクシングの構えを取り、呪文を唱える。

「ドラグナー・ナグル！」

ドラグナー・ナグル。テッドの呪文は結構使い勝手が悪い。

第一の呪文を使用しながら魔力を貯めないと、次の呪文が使えない。その他の呪文を使う時は、一段階ずつ呪文を唱えていくしかない。だけど、これは守護獣……アルフやザフィーラ辺りになら使える。もちろん、アंकにも。アंकはあんまりデバイスを使わない。

だから、今の完全体のままだったら、攻めに転じられる！

「はああああ！」

ブンブンブン！

「ちい！」

俺のパンチを紙一重で避け、そのまま攻めに転じようとするアंक。まだだ！まだ俺のターンだ！

「ギアを上げるよ！セカン・ナグル！」

ドン！

俺は更に速さを上げる。

一段階アップしたスピードで再びアंकに殴りかかる。だがアंकはそれを今度は全て捌ききる。
まあ、さっきみたいに紙一重で避けるのはキツイよね。

でも……無駄無駄！

「ギアを上げるよ！サーズ・ナグル！」

更にスピードアップ。

もう、これを捌ききるのは難しいよ！

「ハアッ！」

避けるのも捌くのも出来ないと直感したアंकは空に飛びあがる。
へえ、そうしちゃう……マジで？まあ、良いか。

「上に飛び上つちゃ、俺の格好の的じゃん ザケルガ！」

シュン！

一直線上に真っ直ぐな電撃がアंकに向かう。
ザケルガ、ガッシュやゼオンが得意とする呪文の一つだ。

ザケルと違い、真っ直ぐに飛んでくれるので使いやすい。ザケルは放出系だからね。

「はぁ！」

アंकは腕を振って、ザケルガを殴り飛ばす。

おお、すっげえ、殴り飛ばすか……いや、やらんだろ普通……感電しますよ？

「だったら……グラビレイ」

ドゴォッ！

瞬間、アंकはいきなり空から落ちてきて、地面に叩きつけられる。まあ、まだ効果の範囲内だったから良かったよ。

「ぐっあ……！」

俺は、苦しんでるアंकの前に手を出して、一言……。

「降参、してくれるよね」

そう言い放つ。

第十五話 はやて視点と模擬戦（後書き）

いやあ、やっぱりガッシユの世界の呪文はこの世界にとってはチートだね

あ、補足

アニスは心の力ではなく、魔力で呪文を使っています
そこん所、よろしく！

それにしても、やっぱり戦闘書くの楽しいわ

だからたまに自重できなくなっちゃうんだ

そして、アニスの可愛い場面があまりなかった今日の話

明日は可愛いアニスたんを書いてハアハアしたいです

では、ここまで読んでくださりありがとうございます

第十六話 羽休め（前書き）

やあ

今日は木曜日の番外編を書いたよ

まあ、面白い面白くないかは、読んだ人たち次第です

それでは、本編始まります

第十六話 羽休め

はやてサイド

「オーケー、降参だ」

「えへへ、また俺の勝ちいゝ。そろそろアंकもデバイス使ったら？」

「凄いなあ……アंकさんに勝つてもうた。あれが魔法か……何か、実感湧かんな」。

「バーカ。俺がデバイス使うとしたら、人間の状態でしか使わねえよ。この状態で使ったら疲れるんだ」

「……アंक、お爺ちゃんみたいだね……」

「ほっとけ」

何か二人が軽口を叩きあいながらこつちに近づいてくる。

「いやあ、それにしても……凄かったですね」

「そうですねえ」

「前に一度戦ったんですけど……いやはや、あれでまだ全力ではないとは……流石に凹みます」

「ザゼルさんもアニス君と戦った事あるんですか？」

「ええ、つい最近にですけどね。あの時はあんな魔法は使わずに、ほとんど剣術と体術でやられちゃったんですけどね」

おどけて苦笑しながらザゼルさんは言う。
それは悔しいとか、そんな感情なしに……本当に敬服しとる感じの
声やった。

「やっぱり、私も強くないといけないですかね。更に使い魔も増えそうですし……競争率も高くなりそうですし……」

「競争率って……何がですか？」

「いえ、ただの独り言です。気にしないでください八神さん」

「はあ……」

何やろう……ウチも強くなるといけん気がしてならんのやけど…
…。

「ああ、疲れちゃった」

いつの間にかもうウチの所までアニス君が来ていた。
アニス君は少し肩で息をしている。

「アंक〜……暑い……」

「だったら南国の設定にすんじゃねえよ……」

「しょうがないじゃん、本家がそうだったんだから……あうあう」

はあ、あうあう言つとるアニス君はかわええな。

やっぱアニス君はあれや、天然さんやな。素手それをやつとるんだから……ある意味尊敬するで。

「はやてちゃんは大丈夫？結構暑いけど」

「ああ、そう言われれば暑いなあ……」

「どうせなら、遊んじゃう？水着に着替えてさ。はやてちゃんはさ……泳げないけど……その……水際に座ってるだけでもだいぶ違うと思うんだ」

「……そやな。せやったらええかもなあ。でも、水着持ってきてないで？」

「それだつたら心配ないよ」

パチン。

そう言つて、アニス君は指を鳴らした。

そしたらいきなり空間が割れて、その中をアニス君が覗き込む。

「えつと……確かこの辺に……うわっ！コラ！争うな！ひやつ、手を舐めるな！うわあ、ベトベト……きやつ！ちよつ、コラ！触手伸ばすな！いやあ！服に入ってきたああああ！こいつ食え！危ないから食つちまえ！」

【ウボアアアアアア……ゴックン……ゲプ……】

「よしよし」

（（そこに何が入っているのか、凄く聞きたい……でも聞いたら負けだろう（ですね）（やね）（））

「ん〜っと……あ、あつたあつた」

そして、そのまま何かを引きずり出してくる。
その手に握られていたのは……スク水。

「はい、これしかないけど……我慢してくれると嬉しいんだけど……」

「……まず、アニス君が何でスク水を持つとるのかを小一時間問い
ただしたいねんけど……」

「八神聞いてやるな……こいつもこいつで苦労してるんだ……」

「そう……これだけは聞いてほしくないんだ……」

何や、アニス君とアंकさんが今にも泣き出しそうな顔をしてるのは……何でやるう？

アニスサイド

そう……このスク水は……前の世界で学校に通ってた時にストーカーから送られた品物です……。
どうやら魔法で作られていて、成長しても着れる優れものらしいです……。

しかもこれ、捨てても捨てても戻ってくる魔法も掛かっているのです。今まで魔法空間に投げ捨てていた物だ。

まあ、安全性は大丈夫。

俺一回着たから。その時使用人全員が鼻血を噴き出して倒れた。どうやらチャームの魔法が掛かってたらしい（実際は掛かってなくて、自分の恐ろしさに気づいていないアニス。可愛さ的な意味で）。まあ、ほとんど魔法は解除したので大丈夫。でも捨てても戻ってくる魔法と伸び縮みする魔法は消えなかった。

「はい、これ」

「あ、ありがとな……」

何かはやてが憐れみの視線を向けてきてるのは……気のせいであつてほしい。

「じゃあ、あの屋敷の中で着替て来て？あ、アंक……運んであげて……」

「分かった」

アंकはすぐに動き出し、車いすを押していく。
アंकも一応、屋敷の中知ってるから大丈夫だろう。

「アニスくん」

ガバッ！

「ふわあっ！？ザ、ザゼルさん！？」

「さあ、今なら私と良い事できますよ？さあさあ、良い事しましょうよ！と言つか、食べても良いですか？」

ゾクゾク。

「ひやあああ……！み、耳元で喋らないでください……くすぐったいです……」

「ふふふ……その年で、良い感度ですね……これは食べごたえがあります……」

「いやあ……だから、耳元で囁かないでください……はう……」

「ああもう……こんなに愛らしい人を主人にしたのは初めてですよ……」

そう囁きながら、ザゼルさんは俺の体をまさぐりだす。
うわあ！嘘嘘！？ダメダメダメダメダメ！！ダメEEEEEEEE！！

「死ね！」

ドスッ！

「ったあ！」

「ハア……ハア……ア、アंक……」

「全く、人が目を離れた瞬間これだ……」

アंकがはやてを連れて、既に戻って来ていた。
た、助かった……はあ、もうザゼルさん呼ばない方が良いのかな？

「……あの……私砂に埋まっちゃったんですけど……」

「知るか、そのままずっとその状態で居やがれ！」

「……あつ……」

まあ、頭を冷やすには良いかもね……日に晒されて冷やすどころではないだろうけど……。

でもザゼルさんが悪いので、一向に可愛そうとは思わない。

「あはは、アニス君も大変やな」

「もう、他人事だと思って……結構恥ずかしいんだよ？」

「じゃあウチが恥ずかしいと思わなくなるほど胸揉んだんで？」

はやては手をワキワキさせながら、いやらしい顔で見てくる。
いや、そのワキワキやめなさい……女の子がはしたないよ？はあ、
毎日貞操の危機とか……嫌だなあ。

「そ、それじゃあはやてちゃん。行こうか」

「せやね……あ、所で……アニス君はいつここ出るん？ウチ、洗濯
とかしないといけないから」

「ああ、言ってなかったっけ？ここから出るのは24時間経って
からじゃないと戻れないよ？」

「……へっ？マジかいな……せやったらどないすんねん！ウチ家事
とかあんねんけど！？」

「大丈夫だよ。こっちの中では24時間だけど、外の世界からして
みれば一時間しか経ってないから」

「……うん、ウチはもう何も驚かん……驚かんで……」

「？」

はやてが何かぶつぶつ言いだしたけど……どうしたのかな？

まあ、大方現実味が無くなってきたんだろうね。大丈夫、君の周り
はもう少しで現実味が無くなるから。

まあ、騎士達がねえ……でも、優しい奴らだから大丈夫だろう。

「さ、遊ぼうか、はやてちゃん！」

「うん！」

俺ははやてを車いすから抱き上げて、お姫様抱っこする。

「ア、アニス君……力持ち何やね……」

「……ま……まあ……ね……」

「……無理しとるんか……」

「……してない……よ……」

「嘘や、腕と足がプルプルしとるで？」

「……あうあうあうあうあう……ア、アंक……パス！」

「……はあ、ほら、こっち寄せ」

俺はアंकにはやてを渡すと、その場に座り込む。
はあ、やっぱり筋力無いからキツイな……。

「あはは、ありがとうなアニス君。ウチそれだけで嬉しいねん」

「……はやてちゃん……」

「ほな、遊ぼうか！」

「うん！」

俺とはやてとアंकは、そのまま海の水際で遊びまくりました！！

「……あのー……私は何時になったら出られるのでしょうか……結

構深めに埋まっ たんで……力使えなんですよね……あの、今回の件、深く深く反省してますので……出していただけたら嬉しいのですが……」

ザゼルは犠牲になっ たのだ……by 作者

~~~~~

「いやあ、楽しかったなあ」

夜、あのまま遊びまくり、はやてちゃんにご飯を作ったりして、そのまま夜になった。

今はもう、寝る時間だ。

「それにしても、ここがアニス君の部屋か……何か、地味やな」

「ほつといてよ、俺は無駄な物は置かない主義なんだ」

「とか言いながら、この押し入れにはごっそりスパッツ入っ とんのな」

「いや、勝手に開けてみないでくれる？」

プライバシーの侵害！！駄目！絶対！

「所で、ウチは何処に寝たらええん？」

「あ、そっか……ここにははやての部屋無いんだもんね……じゃあ今から部屋の用意するよ」

俺は立ち上がり、部屋から出ようとドアに向かおうとする。  
だが、それをはやてが俺の腕を掴み阻止する。

「……どうしたの？はやてちゃん」

「……あの……な？もし、もしやよ？アニス君が嫌じゃなかったら……ウチと一緒に寝ても良い……かな？」

「……はう……はやてちゃん……些か大胆過ぎだよ……あうあうあうあう……」

うう、顔が赤い……照れてるよ俺……あうあう……。  
何かそろそろ、このあうあうが定着しつつあるね……自重しなきゃ

……。

「……う、うん……俺は別に構わないよ？」

「ホンマに！？じゃ、今すぐ寝るで！」

うん……やっぱりはやてちゃんは些か大胆過ぎだね……。  
はあ、俺理性保つかないや、いつも保ってたし大丈夫だろう……。  
こうして、俺ははやてちゃんと一緒に寝ることになった。

「……アニス君、ほんまに小っさいなあ……ウチの腕にスッポリや」

「あう……はやてちゃんの胸が……顔に当たってる……」

あうあう、俺はロリコンじゃないよ！

こんなもので、俺は欲情なんかするものか！否！断じて否だ！こんなもので、俺の鋼の精神は崩せるものか！！

「アニス君の髪の毛、良い匂いや……」

「か、嗅がないでよ……はう……」



「ああ、ホンマに可愛い！」

ギョッ！

「ふわぁ！？ちよつ、はやてちゃん……苦しい……」

はやては思いきり俺を抱きしめる。

と言うか、主に顔なんでかなりキツイ……。

「……アニス君……ウチ、こんなに幸せでええんやろうか……」

「……はやてちゃん……」

「こないに暖かい家族が出来て……ホンマウチは幸せ者や。ホンマに……ウチには勿体ない位やで」

「……人が幸せになるのに、良いも悪いも無いんだよ？むしろ、子供だからこそ、色んな幸せを体験して、次の世代に繋いでいく。その方が、ずっと幸せが続くでしょ？俺は人の嬉しい顔や幸せそうな顔が大好きだ、だって、自分も幸せな感じになるから。それが俺のハピネス」

「……アニス君……ありがとうな」

俺とはやては、暖かい気持ちになり……そのまま就寝した。

そして朝、起きてからすぐにゲートに行き、外の世界に戻る。

まあ、本当に一時間しか経ってなくてはやては驚いてたけど……それはまた別のお話。



「あの……私、忘れられているのでしょうか？」

その後、ザゼルは何とか自力で脱出し、そのまま魔界に帰って行っ  
た……。

## 第十六話 羽休め（後書き）

不純なザゼル乙

まあ、頑張れザゼル、お前には良い事があるさ……たぶん……

それにしても、最近ドット寒くなったな〜とか思ってたら、まだ暑い時間が……

器官系とアレルギー系の発作、両方持つてるから、春先は酷いよ？

季節の変わり目と、花粉のダブルパンチです

まあ、死ぬね

はあ……体が環境に着いていきかないです

さて

ここまで読んでくださり、ありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0814x/>

---

死にたがりな男の娘が転生

2011年10月10日07時37分発行